

京都府埋蔵文化財情報

第 18 号

鶏冠井遺跡銅鐸鑄型の復原	山中 章	1
田辺町郷土塚 4 号墳の調査	石井 清司	6
長岡宮跡第 164 次調査	石尾 政信	13
一昭和60年度発掘調査略報		18
7. 河 守 遺 跡	11. 上 中 遺 跡	
8. 土師川改修関係遺跡	12. 篠・袋谷窯 1 号	
9. 綾 中 遺 跡	13. 燈籠寺遺跡	
10. 味 方 遺 跡		
資料紹介 亀岡市千代川遺跡出土の壺形土器—弥生時代中期 に用いられたタタキ原体の一例—	田代 弘	35
府下遺跡紹介 31. 長岡宮跡築地跡		38
長岡京跡調査だより		41
センターの動向		46
府下報告書等刊行状況一覧		48
受贈図書一覧		52

1985年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



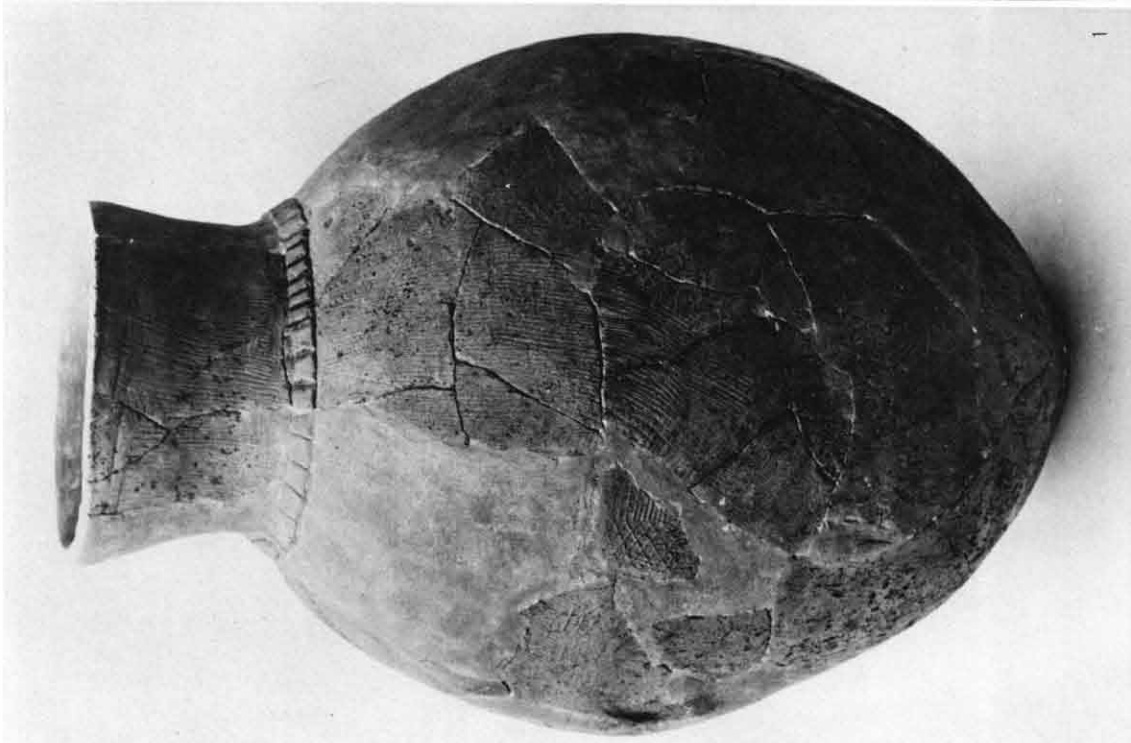
(1) 調査地全景（南東から）



(2) 土壇 S K16409 唾壺出土状況



(2)・(3) 同・細部



(1) 千代川遺跡出土壺形土器

鶏冠井遺跡銅鐸鑄型の復原

山 中 章

1. はじめに

鶏冠井遺跡第2次調査出土の銅鐸鑄型については、すでに略報を紹介したことがある。^(注1)
 また最近、春成秀爾氏は、本鑄型について詳細に論じられ、その復原形態を「菱環鈕2式
 くだっても外縁付鈕1式」と推定されている。^(注2) 筆者はこれに異論を唱えるものではないが、
 復原形態の細部において相違があるため、鑄型片に残された文様や、製作工程で付加され
 た線刻のデータを詳細に検討することによって復原の根拠を示そうとするものである。^(注3)

2. 銅鐸鑄型の出土状況

銅鐸鑄型は河SD8214中層から出土した。SD8214は、下層が砂礫と有機質土の互層、
 中層が砂質土と粘質土の互層、上層が粘質土の堆積した自然の流路である。堆積土から河
 の流れを推測すると、当初、SD8214の基盤層である縄文晩期の包含層を削り出す勢いで
 流れていた河(下層)が、次第に水量を少なくし(中層)、最後には全く流れなくなり湿地と
 化したもの(上層)とすることができる。各層の堆積時期は、出土土器より中・下層が弥生
 時代前期中頃から中期前半、上層が中期中頃から後半に位置づけられる。

3. 銅鐸鑄型の特徴

銅鐸鑄型は、現存最大長縦8.0cm・横9.4cm・厚さ3.2cmを測る。鑄型は頂部及び左側面
 に原面をとどめている。また鑄型面は鈕・舞・身の一部を残している。まず、鑄型面の各
 部位の線刻状況について整理しておく。

鑄型頂部には縦に一本の線刻がある。これを後述する理由から、鑄型の合わせ目印とし
 て刻まれた鑄型中央の線刻と考えた。この推定中心線から左へ1.2cm、身の上端から上へ
 2.0cm、鑄型推定表面より奥へ0.5cmの位置に「へ」字形の線刻が0.3cm間隔で2列平行す
 る。線刻は黒変しており、その位置から鈕の文様の一部と判断した。「へ」字形は、綾杉
 状の文様の屈折部に軸線を入れないものと考えられる。

舞は、底辺5.2cm・高さ1.0cmの三角形状に残っている。その全面に斜格子状の線刻があ
 る。線刻はまず、鑄型面に向かって右下から左上へ3~4mmと比較的等間隔に、平行(80°
 前後)に刻み、ついで左下から右へ2.5~5.0mmと不等間隔に、かつ不揃いに(45°~60°)刻

む。表面は平滑で、身のように焼けただれていない。このため線刻も明瞭に残り、断面「U」字形の丸ノミの跡をはっきり読みとれる。

身は、上辺の横帯部分のみが長さ5.2cm・幅1.8cm残っている。横帯は、舞との境には界線を刻まないが、下辺には界線を刻んでおり、これにより横帯幅1.8cmが復原できる。横帯は斜格子文である。左上から右下への線刻(aライン)は2~4mm間隔に、平行(70°前後)に、右上から左下への線刻(bライン)は、同間隔で平行(45°前後)に刻む。線刻の順は、左半部ではa→bの順に、右半部ではb→aの順である。なお、刻み誤ったのであろう、文様と異なる線刻が5か所にみられる。身の表面は熱によってただれており、斜格子文の一部は剥落して菱形状を呈しているものもある。

鋳型外面は頂部と左側部に原面を残す。頂部は長さ8.2cm・高さ3.0cmの三角形形状に残っており、3本の線刻がある。

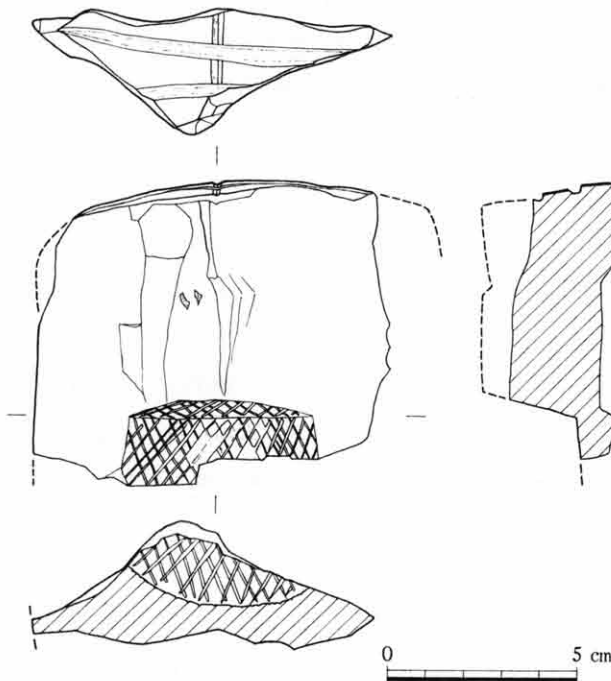
線刻Aは頂部中央に鋳型面に対し直角に刻む。線刻は長さ1.85cm・幅1.5mm・深さ1.0mmを残す。溝内には煤が付着しており、線刻Aは鋳型製作時から刻まれていたと推測できる。

線刻Bは頂部上辺に鋳型面に対し平行に刻む。線刻は長さ3.2cm・幅4.5mm・深さ2.5mmを残す。断面「U」字形を呈し、上辺に向かって緩やかな弧を描く。溝の壁面には数

条の擦痕を残す。線刻は頂部全面に付着した煤を切っている。

線刻Cは頂部下辺に鋳型面に対し平行に刻む。線刻は長さ7.6cm・幅4.0mm・深さ2.5mmを残す。断面「U」字形を呈し、下辺に向かって緩やかな弧を描く。溝の壁面と底面に数条の擦痕を残す。線刻は頂部全面に付着した煤を切っている。

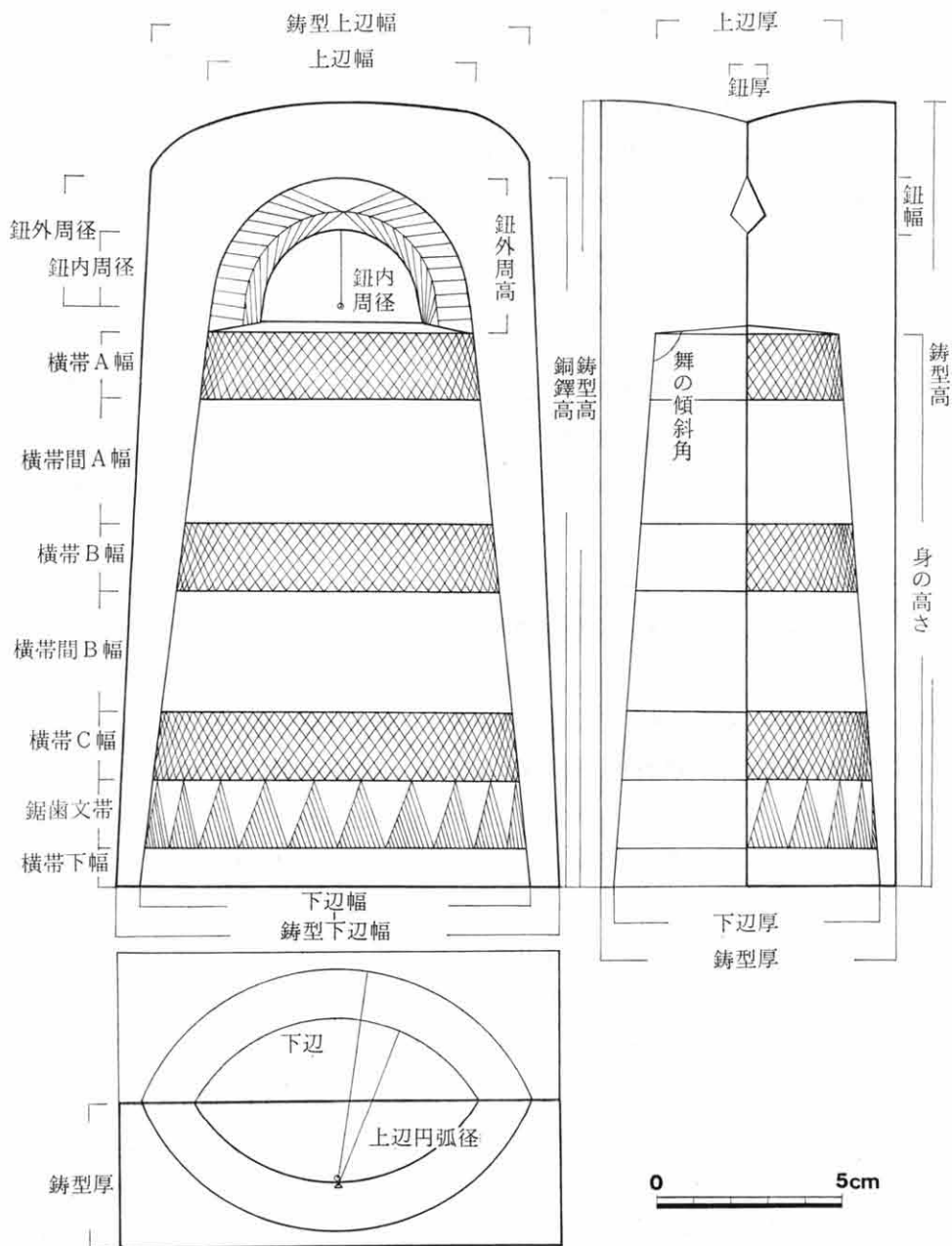
これら3本の線刻の先後関係は、B・CがAを切っており、A→B・Cの順と



第1図 銅鐸鋳型実測図

わかる。B・Cの先後関係は明らかでない。

左側部は長さ3.5cm・幅0.5cmを残している。この中央部に一画の長さ1.2cmの「く」字形の線刻を残す。線刻は幅0.2mm前後と細く、浅い。左側部にも全面に煤が付着しているが、線刻は煤を切っており、頂部の線刻B・Cと同じ時期、性格のものと推測できる。



第2図 銅鐸鑄型復原図

4. 銅鐸鑄型の復原

以上の事実をもとに、銅鐸鑄型の原形復原を試みる。復原の手順は以下の通りである。

(1) 鑄型外面頂部の線刻Aは、鑄型を合わせるための目印と判断できる。線刻Aはその位置から鑄型の中軸線にほぼ匹敵するものと推測し、これを鑄型の左右の基準線(中軸線)とした。中軸線と鑄型外面左側部との距離を折り返すと、鑄型の上辺幅10.2cmが得られる。

(2) 鈕の文様痕跡から、鑄型上面の位置の推測が可能である。鈕の厚さを鈕頂部で1.0cmと仮定すれば、鑄型上面は、鈕の文様から0.5cm上に位置することになる。この上面の位置まで身の上辺の円弧を延ばすと、身の上辺幅(舞の長径)7.2cm、厚さ(舞の短径)5.0cm上辺の円弧半径4.2cmが得られる。この時の鑄型の厚さは4.0cm以上である。

(3) 鑄型の平面形は、銅鐸の裾の広がり規制する。中軸線と左側部の角度から、鑄型の平面形は、下辺に向かってわずかに裾の広がる台形に復原できる。

(4) 鑄型の裾の広がり銅鐸の裾の広がりとの関係は、鑄型の高さを規制する。銅鐸の裾の広がり、横帯によって推測可能であり、上辺に対して約95°の角度で広がることかわかる。銅鐸の裾と鑄型の裾の交点は、鑄型頂部より28.0cmの位置にあり、鑄型は28.0cm以内であることが明らかとなる。しかし実際には鑄型端と鑄造面とが接することはあり得ないのであって、本来はより低いはずである。

(5) 銅鐸の高さは身の文様帯である横帯文の幅によっても規制される。仮に本銅鐸を横帯文銅鐸とすると、文様要素として、3本の横帯、1本の鋸歯文帯、3箇所の無文空間が必要となる。仮りに全ての要素が残されて横帯文(1.8cm)と同一幅であるとすると、身の高さ12.6cm、鑄型の高さ18.8cmが復原できる。しかしこれも実際には、横帯文に囲われた空間部分の方が、横帯文より広いのであって、通例、横帯の1.5~2倍となることが多い。仮に、1.5倍とすると、銅鐸の身の高さは14.4cm、2倍とすると16.2cmとなる。

(6) 鈕の文様の一部である「へ」字形は、鈕の稜部を残していると考えられる。鈕の平面形を半円形にすると、鈕の稜の半径2.6cmが得られる。鈕脚部が舞と接する部分での稜の位置は、身の上辺左右端より1.0cm内側になる。鈕の外斜面と内斜面との幅が同一とすると、鈕の幅は少なくとも2.0cm以上あることになる。

(7) この結果、銅鐸の大きさは、横帯文間が横帯文の1.5倍の時には18.0cm、2倍の時には19.8cmとなる。このいずれの場合にも、裾部での鑄型と鑄型面との距離は、わずか6~8mm程度しかなく、銅鐸の外周に鑿を付すとすると、その幅は、わずか2~4mmとなる。このことは、本銅鐸鑄型が、少なくとも外縁付鈕1式以後のものではあり得ないことを示している。

(8) 舞の文様については、身の線刻と幅や深さ、角度において違いがある。このため、追刻の可能性が多分にあるが、現状では判断を保留せざるを得ない。

5. ま と め

以上の復原結果とその意義についてまとめると次の通りである。

- ① 本鑄型は、鱸のほとんどない菱環鈕式銅鐸のものであること。
- ② その大きさは、身の高さ14.4～16.2cm、鈕の高さ3.6cm、舞の長径7.2cm、短径5.0cm、身下辺の幅10.3～10.6cm、下辺の厚さ7.0～7.2cmであること。
- ③ 鑄型の廃棄は砥石転用後に行われており、その時期は畿内第Ⅱ様式段階であること。鑄型使用時はこれ以前であり、畿内第Ⅰ様式新段階まで遡りうること。
- ④ 鑄型の石材は、和泉地方のものであり、乙訓地域での銅鐸生産が、和泉地方と密接な関係にあること。^(注4)
- ⑤ 乙訓地域で最初に弥生文化を受け入れた鶏冠井遺跡は、その初期の段階から青銅器鑄造の高度な技術を受け入れており、当地域の最も中心的な集落と考えられること。
- ⑥ 菱環鈕式銅鐸は、これまでに、兵庫県3例、福井県1例、岐阜県1例、奈良県1例、島根県1例が知られていたが、本鑄型を菱環鈕式と判断することによって、京都府に初めて1例を加えたことになる。大和を中心としたその周辺部に分布が限られるのは、注目すべきことである。

(山中 章＝向日市教育委員会文化財保護係長)

注1 長谷川浩一・国下多美樹・山中 章「鶏冠井遺跡出土の銅鐸鑄型」(『考古学ジャーナル』210) 1982

注2 春成秀爾「最古の銅鐸」(『考古学雑誌』第70巻第1号) 1984

注3 山中 章他「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書—第10集—1983』)として1983年3月には刊行の予定であったが、諸般の事情により、1985年8月1日現在、最終校を校正中という段階にある。或いは、本冊の刊行を前後して完成し、本文と重複する可能性もあるが、あえてここに整理し紹介したものである。

注4 京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の鑑定による。

田辺町郷土塚4号墳の調査

石井清司

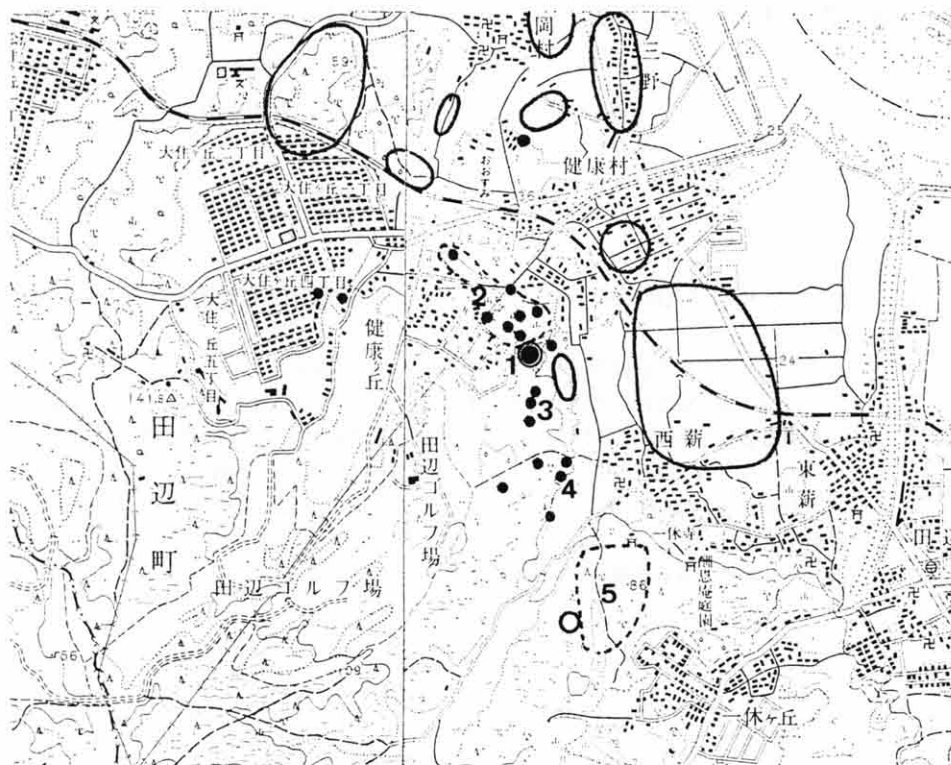
1. はじめに

郷土塚4号墳は京都府綴喜郡田辺町大字薪小字西山に所在する。

郷土塚4号墳は6基の古墳からなる郷土塚古墳群の1基であり、郷土塚古墳群に近接した同一丘陵上に大欠古墳群・畑山古墳群・西山古墳群など横穴式石室を主体とする数基の古墳群が点在している。

これら古墳群のうち、郷土塚2号墳からは家あるいは鳥型の形象埴輪のほか、鉄製品として槍・鏃・斧・鉈などが出土し、外部施設として葺石を敷く古墳時代中期のものである。

郷土塚4号墳の調査は、同古墳が京奈バイパス予定路線帯に含まれるため、工事に先立ち行ったもので、古墳の様相を明らかにすることを目的として昭和60年7月18日から同年



第1図 郷土塚4号墳周辺遺跡分布図

1. 郷土塚4号墳 2. 郷土塚古墳群 3. 畑山古墳群 4. 西山古墳群 5. 掘切横穴群

10月末日にわたり発掘調査を実施した。

なお、郷土塚4号墳という名称は、昭和47年度版『京都府遺跡地図』をもととするが、昭和60年度版『京都府遺跡地図』及び分布調査の結果、大欠2号墳に相当する古墳であることがわかった。今後、古墳名称の訂正を必要とするが、今回の報告では郷土塚4号墳として概要説明を行う。

2. 調査の経過

郷土塚4号墳を含めた郷土塚古墳群は、古墳時代中期の郷土塚2号墳を除き、いずれも横穴式石室を主体とする古墳時代後期の古墳群であると考えられていた。郷土塚4号墳も、分布調査によって、墳丘は後世に削平され、当時の面影をとどめないが、竹林の中に石材の頂部が露出することから古墳と考えられるに至った。

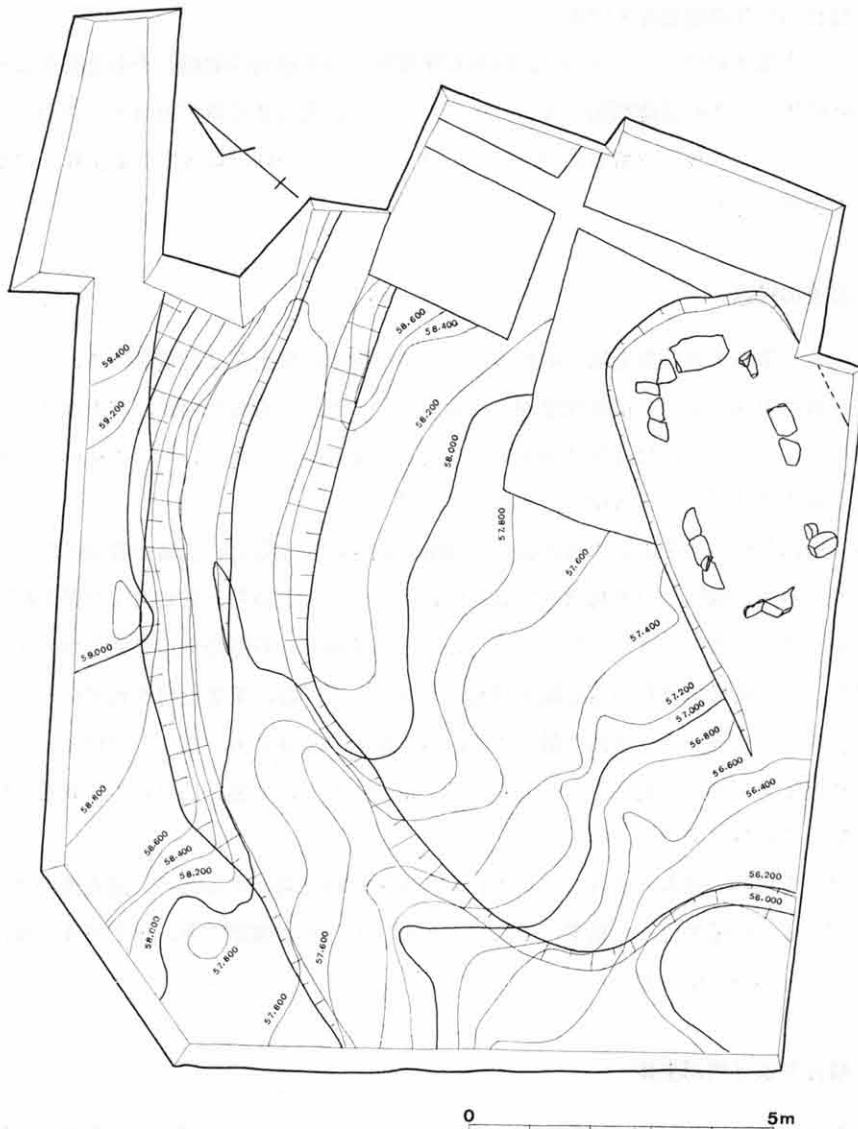
調査は露出した石材を中心に長さ6m×幅3mの試掘坑を設定し、古墳の確認を行った。試掘調査の結果、露出した石材は横穴式石室の奥壁の一部であり、玄室および羨道部は、なお南側にのびるものと考えられるため、調査地を拡張し、石室の全容を明らかにするよう努めた。その結果、側石の遺存状態は悪く、基底石と一部、第2段目を残すのみであったが、玄室床面は河原石を全面に敷きつめ、遺存状態は良好であった。石室内には土器のほか、鉄器を含むが、盗掘にあったためか出土量は少なく、土器は15点以上、鉄器は11点以上を数えるのみである。

調査は、石室内の調査と併行して、墳丘の有無・規模を確認するため、調査地をさらに西および南側の拡張を行った結果、周溝および墳丘の一部が確認でき、郷土塚4号墳が円墳であることが明らかとなった。

3. 墳丘および内部主体

郷土塚4号墳は、上面幅約2~3m・深さ約20cmを測る周溝によって画された直径約16mを測る円墳である。墳丘は地山土に赤褐色土の盛土を行っているが、後世の竹林等により削平を受け、遺存状態が悪く、墳丘盛土は10~30cmを測るのみである。

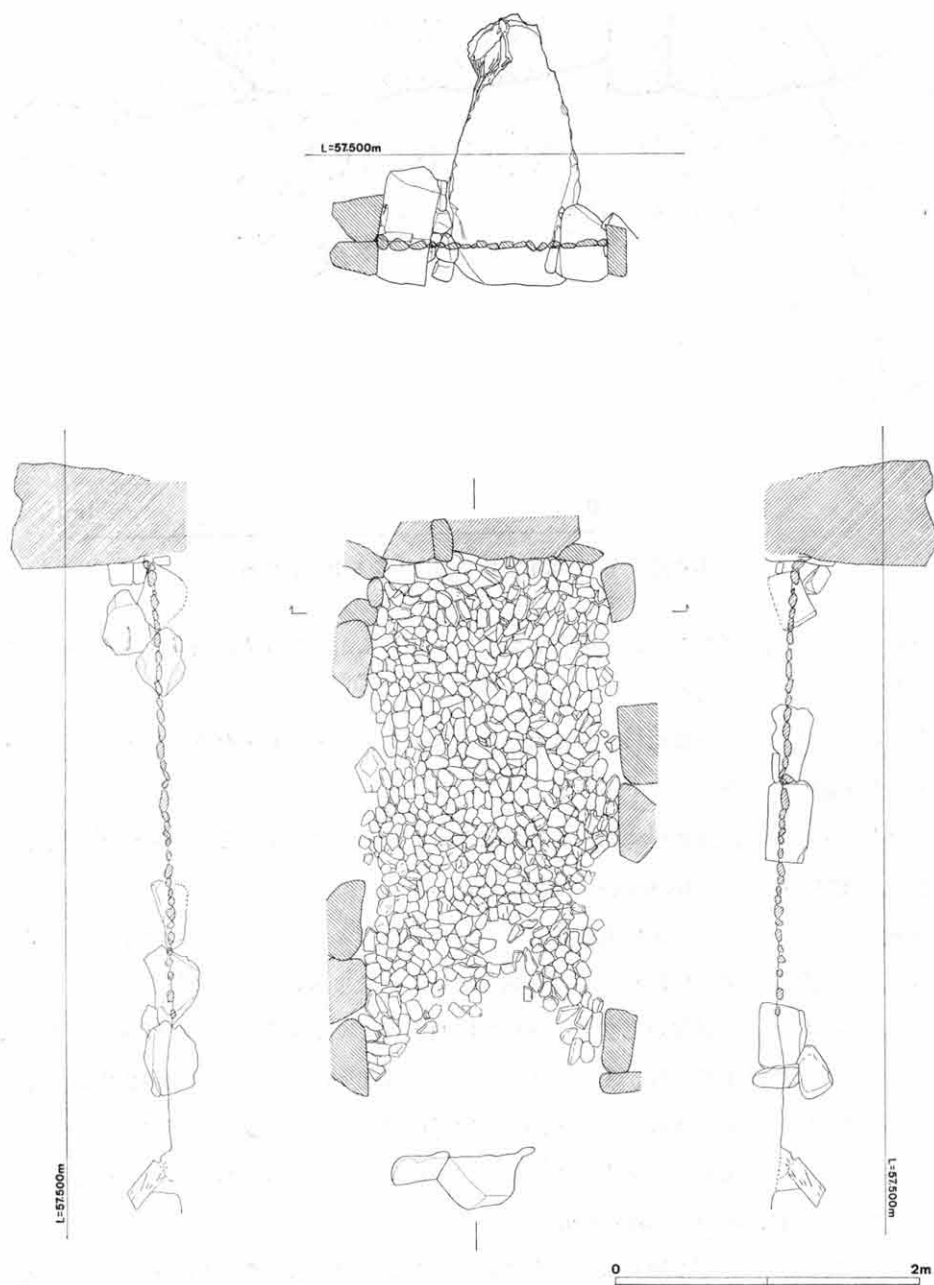
内部主体は全長約6.0m・玄室長約3.7m・幅1.7mを測る横穴式石室である。玄室部床面には拳大の河原石を全面に敷きつめているが、羨道部との境付近では盗掘によるためか、一部河原石が抜き取られている。羨道部には側石が遺存せず、また玄室部にみられたような河原石も敷きつめられていないため、羨道部の長さ・幅については推定の域を出ないが、掘形の南端部のとぎれる部分から長さを推定すると、約2.3mとなる。羨道部には石材の抜き取り痕が明瞭ではないが、掘形の形態より推定し、無袖式の石室と思われる。



第2図 郷土塚4号墳平面図

掘形および石室内の断面観察により古墳の内部主体の構築法を復元すると、まず掘形を堀削したのち、奥壁および側石を順次据え、それに平行して裏込め土を充填する。この際、掘形の底部には奥壁および側石を据える際の溝などは穿たれていない。石室内の内側には地山土に近似した土を厚さ約10cmにわたり版築を行い、そののち、河原石を敷きつめている。なお、石室内には排水溝などの施設は認められなかった。

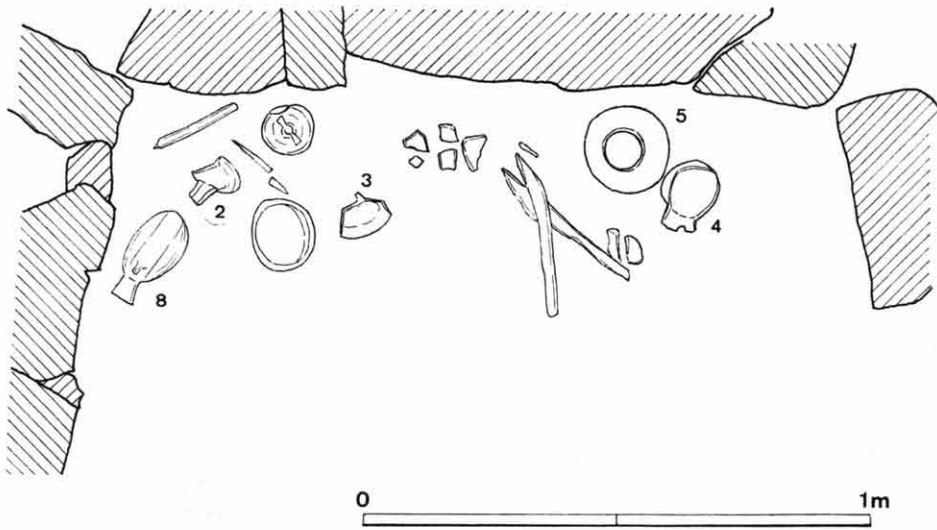
石室内出土遺物はその大半が盗掘などにより荒されており、遺存状態は悪かったが、一部奥壁に隣接して土器・鉄器がまとめて出土した。



第3図 郷土塚4号墳石室平面図

4. 出土遺物

郷土塚4号墳出土の遺物は、その大半が石室内、特に玄室部の奥壁に隣接して出土した。出土遺物のうち、土器については接合および実測作業を進めているが、鉄器についてはサ



第4図 郷土塚4号墳石室内遺物出土状態

ピ取りなどの作業を残すため、今回は資料を提示することができず、概要をとどめるのみで土器を中心に説明を行う。

郷土塚4号墳出土の土器には土師器；壺，須恵器；杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・壺・提瓶・甕などがある。

土師器；壺(4)は、球形の体部から口縁部が直立ぎみに立ち上がる。体部外面は遺存状態が悪く調整不明。口径10.8cm・器高12.5cmを測る。

須恵器；蓋(1)は、天井部が丸みを持ち、口縁部がわずかに外反する。天井部の中央には扁平で中央部がわずかに凹むつまみを貼り付ける。天井頂部に削り調整を施す。

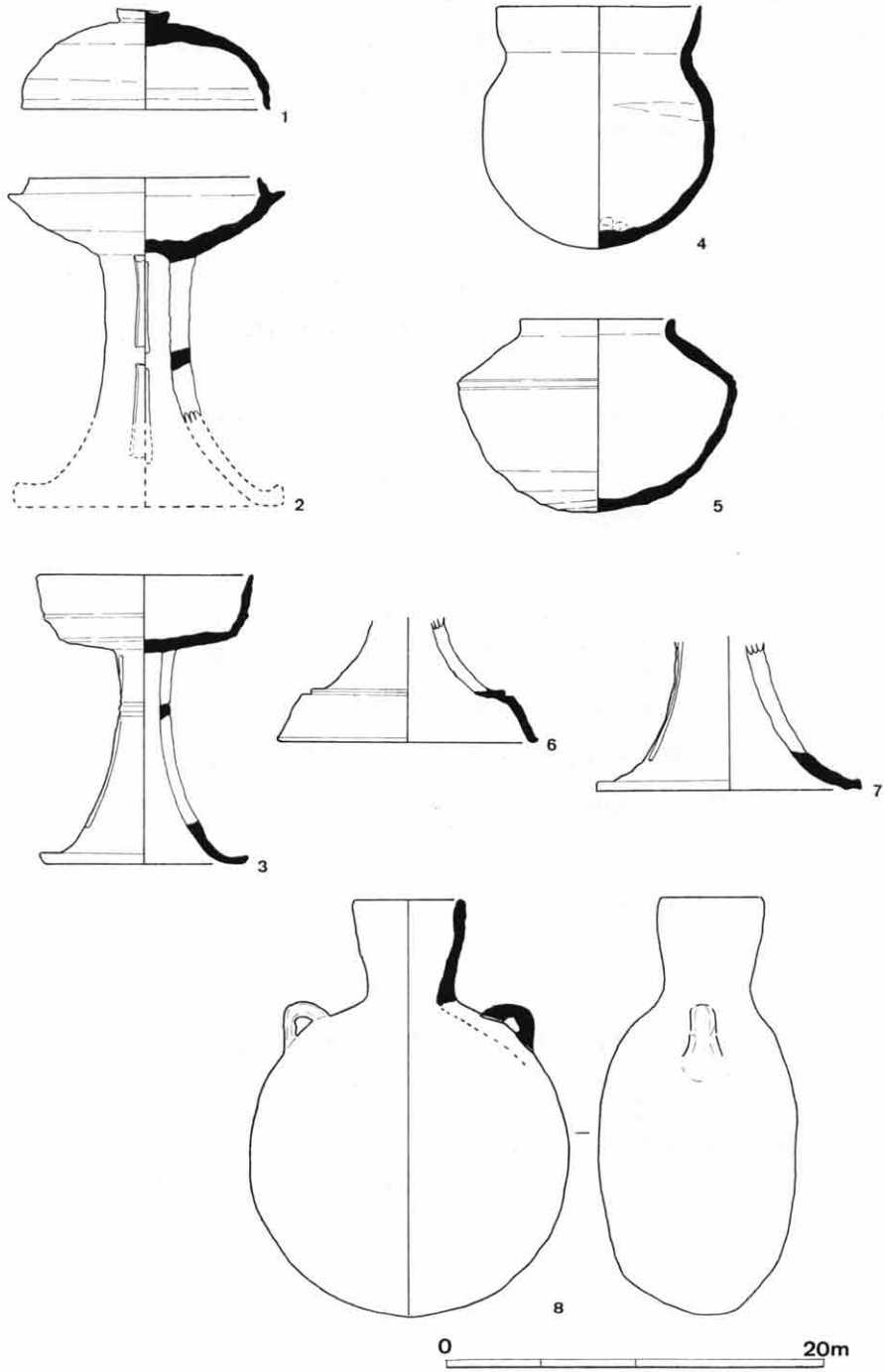
有蓋高杯(2)は、口縁部の立ち上がり部が内傾ぎみに短く立ち上がる。脚部は下半を欠損しているが、2段3方にある透し穴の切り込みは不十分である。2は口径12.2cmを測る。

無蓋高杯(3)は、直立ぎみに立ち上がる口縁部をなし、杯部外面には下端と中位部に突帯と段をめぐらす。脚部には2段2方の透し穴を施し、脚部中位には2条の沈線文をめぐらす。3は口径11.5cm・器高15.0cmを測る。

短頸壺(5)は、口縁部が短く直立ぎみに立ち上がる。体部は肩部を形成し、底部は丸底ぎみとなる。肩部には2条の沈線文をめぐらす。口縁部内・外面、体部上半にははいねいなナデ調整、体部下半にはヘラ削り調整を施す。5は口径8.0cm・器高10.1cmを測る。

提瓶(8)は、斜め上方に立ち上がったのち、直立ぎみに立ち上がる口縁部へ続く。肩部には環状の把手を貼り付ける。8は口径6.0cm・器高21.1cm・体部径17.0cmを測る。

鉄製品は現在、整理中であるため図示しえないが、銀環・鉄鏃・鉄刀・鉄鉗などがある。



第5図 郷土塚4号墳出土遺物

銀環は長径2.2cm・短径2.1cm・厚さ3mmを測る。銀環の表面は剝離しており、芯部分のが遺存している。鉄鏃は長頸鏃・柳葉鏃など3点以上が出土した。鉄刀は長さ25cm以上を測り、断面は二等辺三角形を呈する。鉄鉗は全長30cm以上を測り、握部はそりをもたず、直線的である。鉄部は鉸合部が平らで、厚さ約1cmを測る。

5. ま と め

郷土塚4号墳は発掘調査終了直後であり、出土遺物・遺跡の検討などについてはいまだ不十分である。今回は現地調査の速報であり、今後、詳細な検討を行う予定であるが、現時点において問題点を列記したい。

郷土塚古墳群は『京都府遺跡地図』によると6号墳まで確認されているが、その多くが近年の宅地開発などにより十分な調査がなされず破壊され、遺跡の様相については明らかでなかった。このため、今回調査された郷土塚4号墳によりわずかにその性格を窺い知ることができる。郷土塚4号墳は竹林により旧地形をとどめないが、周溝を有し、横穴式石室を内部主体とする円墳で、須恵器などの出土遺物から6世紀後半を前後する時期の古墳であり、近接した畑山古墳群^(注1)・下司古墳群^(注2)と相前後した時期に構築された古墳である。6世紀以降、田辺町から八幡市東南部の丘陵にかけて横穴式石室を主体とする古墳群とともに、狐谷横穴^(注3)・美濃山横穴・松井横穴・堀切横穴などの横穴群^(注4)が点在し、横穴式石室と横穴という相違した墓制が相前後した時期に構築されており注目される。郷土塚4号墳出土遺物は盗掘などにより旧状をとどめるものが少ないが、そのなかで、鍛造用具として鉄鉗が副葬されており、郷土塚4号墳の被葬者を考える上で注目される遺物である。

(石井 清司=当センター調査課調査員)

注1 吉村正親「畑山1号墳出土の遺物」(『京都考古』第36号 京都考古刊行会) 1985

注2 森 浩一・辰己和弘ほか『下司古墳群』同志社大学校地学術調査委員会 1985

注3 久保田健士ほか「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注4 奥村清一郎「南山城の横穴」(『京都考古』第27号 京都考古刊行会) 1982

長岡宮跡第164次調査<図版1参照>

(7AN18B地区)

石尾政信

1. はじめに

長岡宮跡第164次調査地は、向日市寺戸町西ノ段にある。この調査は、向日町競輪場の第4・5スタンドの建っていた場所に、新スタンド兼投票所の建設が計画されたため、実施することになった。調査は、建設予定地の約650m²を、昭和60年9月2日から掘削を開始し、11月2日に現地での作業を終了した。

調査地は、長岡宮域の西端で、南一条第1小路の延長上にあつて、西方官衙地区の北端で、平安宮でいえば右近衛府にあたる。また、天狗塚という字名が残っていることから古墳との関連も指摘されている。向日町丘陵の稜線が当地の西側を南北にはしり、元稻荷古墳のある丘陵最高地とは約18mの比高差がある。調査地周辺は、競輪場が造られる以前は竹藪であったことが旧地形図(大正11年京都市発行)からわかる。競輪場の造成により、旧地形はかなり改変されていると予想された。

周辺の調査として、南東約200mで宮内第82次調査が^(注1)あり、この調査では主殿級の南北に廂を持つ東西方向の礎石建物跡1棟、その東側で東脇殿と推定される南北方向の建物が検出されている。

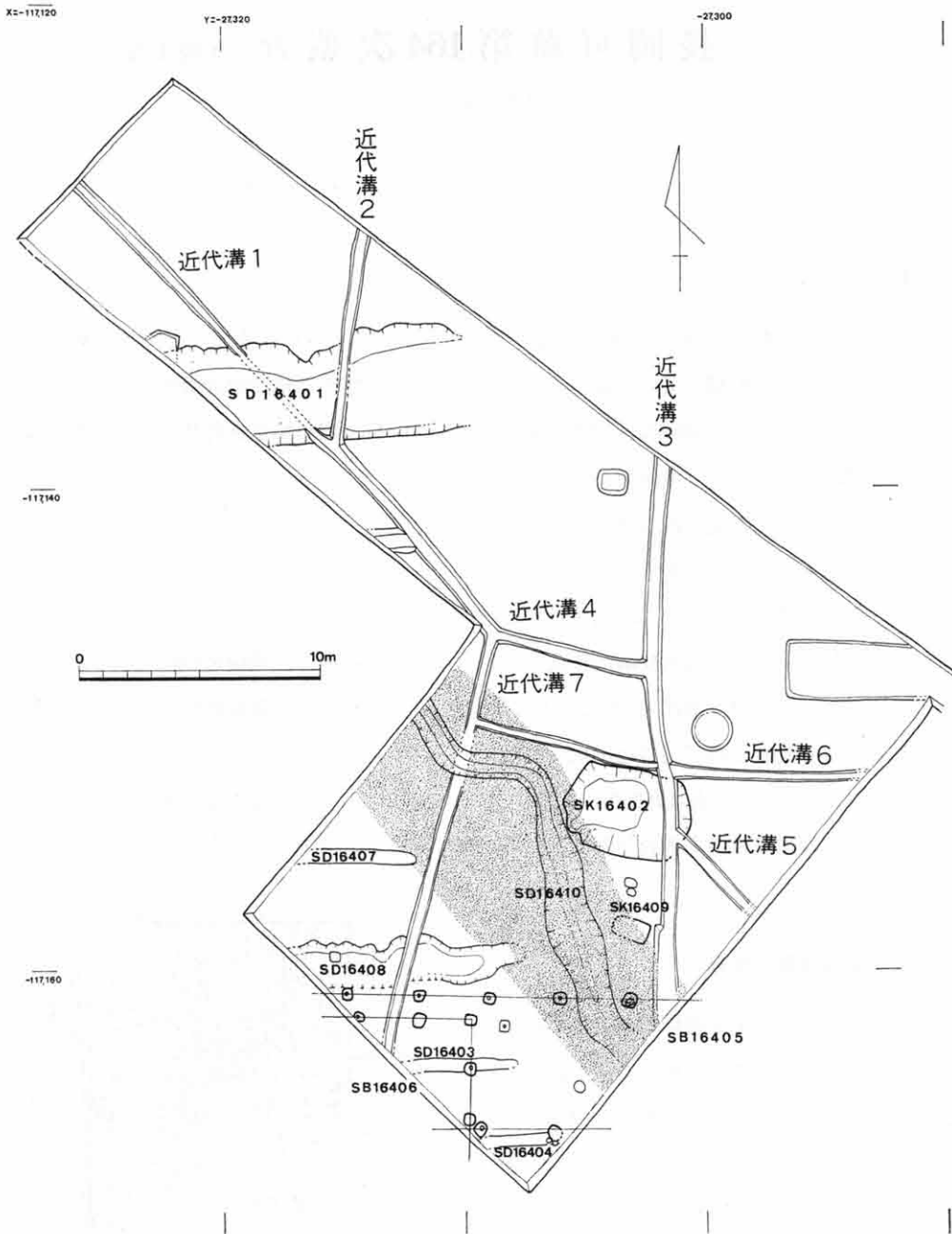
2. 調査概要・経過

調査地は、向日町競輪場の西方に位置し、現在の標高はおよそ42~43mである。旧地形の改変が予想されたため、最も被害の少ないとおもわれる調査地東端に、走路と平行して幅10mのトレンチをL字形に設定し掘削を開始した。基本土層は、攪乱・盛土層の下にかつて竹藪であった頃の盛土層があり、厚い部分は1m以上ある。竹藪盛土層の下は、黄褐色土層および砂礫層となる。

掘削した結果、トレンチ全域を縦横に走る近



第1図 調査地位置図



第2図 調査地平面図

代溝，東西方向の溝(SD16401)，西南部で楕円形の土坑(SK16402)と炭を大量に含んだ黒色土，暗灰褐色土の広がりを検出した。黒灰色土層の上面から多量の遺物が出土したので，西南部の拡張を行った。拡張部分から掘立柱建物跡(SB16405・06)とこれに伴う雨落ち溝

(SD16408)、および東西方向の溝(SD16403・04・07)を検出した。黒灰色土層は、北西から南東にのびる蛇行した溝(SD16410)と、その周辺の傾斜面に堆積していることが判明した。そして、黒灰色土層の下から緑釉唾壺の出土した土壇(SK16409)を検出した。

3. 検出遺構

この調査で検出した遺構には、近世～近代の地境溝・同土壇、長岡京期の東西溝・掘立柱建物跡・土壇などがある。長岡京期以前の遺構・遺物は見つかっていない。以下に主要遺構について簡単に記す。

SD16401 幅4～4.5mの東西方向の素掘り溝である。溝は西から東に傾斜しており、東端は不明瞭となる。西端の最も深い所は約0.7mある。溝の下層から長岡京期の遺物が出土した。

SK16402 東西方向の素掘りの楕円形土壇で、長径5.3m・短径3.7m・深さ0.7mある。土壇は赤褐色・暗赤褐色土の埋土で、長岡京期の遺物が出土した。

SB16405 建物の全体規模は不明であるが、北側に東西方向に5か所の柱掘形が並び、その南方に2か所の柱掘形がある。これから、東西4間以上、南北2間の掘立柱建物跡と考えられる。柱間は、東西10尺(2.95m)・南北9尺(2.7m)ある。北側柱列の東端の柱掘形に20cm前後の河原石が置かれており、柱根を安定させるためと思われる。また、東方2か所の柱掘形は、黒灰色土層から掘り込まれている。この建物跡は、北側柱列と南側柱列がわずかにずれるところから、北側柱列が東西方向の柵列である可能性もある。

SB16406 これも全体は不明であるが、東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。柱間は、東西8尺(2.4m)・南北7尺(2.1m)ある。

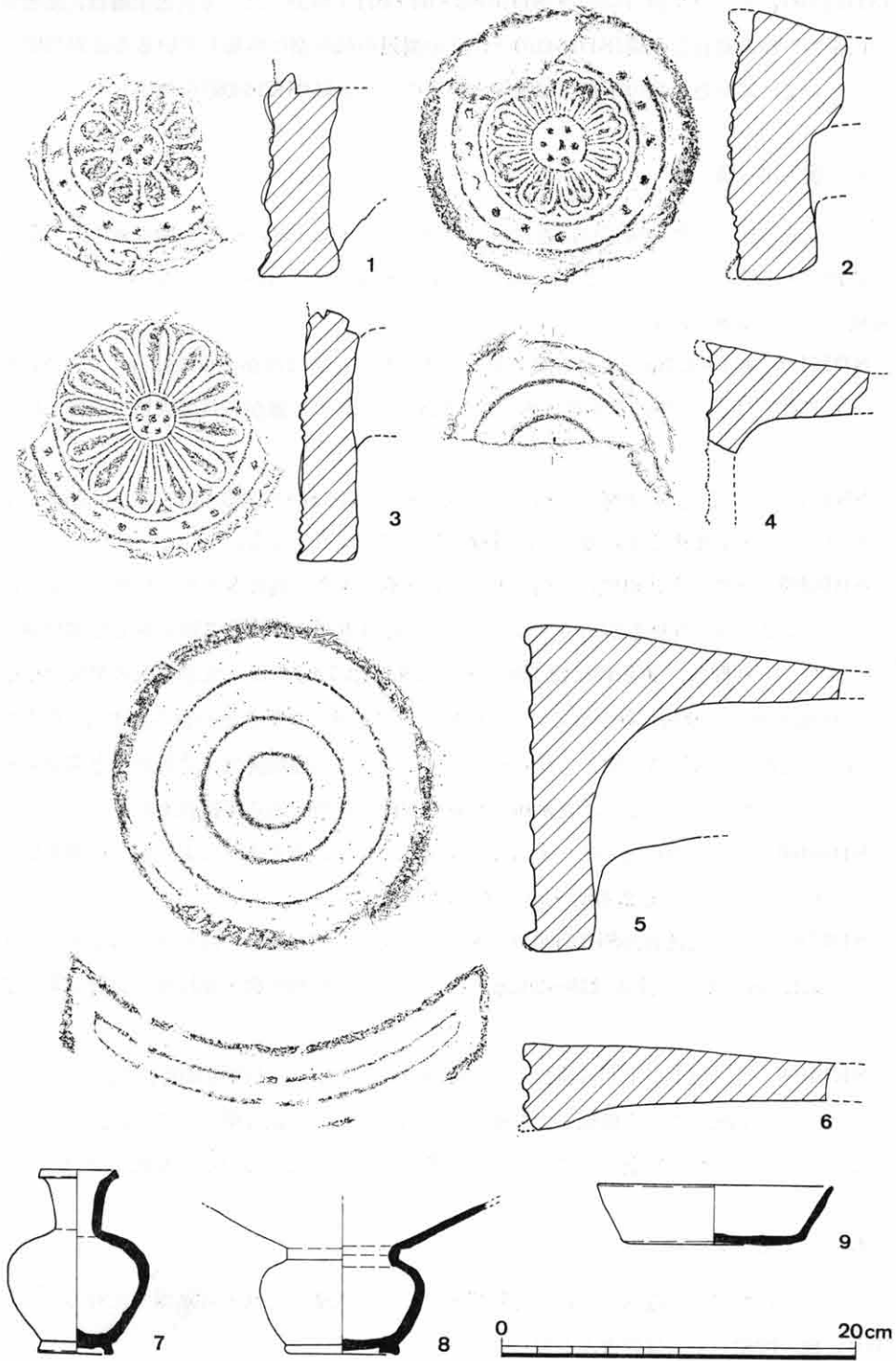
SD16408 掘立柱建物跡SB16406の北側雨落ち溝とおもわれる。溝の東端は不明瞭であるが、幅1.5m前後で、深さは15～20cmある。溝中から緑釉火舎・瓦片等の長岡京期の遺物が出土した。

SK16409 黒灰色土の下から検出した幅0.9m・長さ1m以上(西側は削平されている)の土壇である。土壇の中から横転した緑釉唾壺が出土した。唾壺に隣接して、直立した釘が頭部を下にした状態で出土したことから、木櫃状のものに入っていた可能性が高い。

4. 出土遺物

出土した遺物には、近世～近代の陶磁器・瓦、長岡京期の瓦類・須恵器・土師器などがあり、他の時期のものはほとんどない。

瓦類には、近代溝4に5～10cmの礫とともに埋め込まれていたもの(2・3)や、黒灰色土



第3図 出土遺物実測図・拓影

層上面(5・6)及び周辺(1・4)から出土したものがある。黒灰色土層上面では、軒瓦とともに、須恵器杯・皿・蓋・壺・甕や土師器杯・皿・椀・蓋・高杯・ミニチュアカマド・墨書土器「□人給」(須恵器)などが出土した。溝SD16401からは須恵器壺(7)・杯、土師器杯・椀などが出土した。

軒瓦は、重圈文軒丸瓦(5)・同小型(4)、周縁に唐草がめぐる平城宮6091A型式(1)・同6135A型式(3)・同6291A型式(2)、重画文軒平瓦(6)など合計14点ある。

緑釉唾壺は、残存器高8.3cm・胴径9.2cm・底径5.5cmある。器形は8世紀の彩釉陶器小壺に外上方に大きく広がる口縁部を取りつけた形態で、肩部に胴部最大径がある。口縁部内外面、胴部外面に細かくヘラミガキを行い、全面に淡緑色に発色した釉が施されている。灰白色の緻密な胎土で焼成はやや甘い。

5. ま と め

今回の調査では、当初予想された競輪場造成による削平はなく、長岡京期の建物跡等の遺構を検出した。地形は北から南に傾斜し、また西から東に傾斜するが、黒灰色土層下の蛇行する溝SD16410が最も低い場所に位置する。

調査地は、推定西一坊大路中軸線(Y=-27,350.35)から約40m東方にあたり、推定南一条第1小路中軸線(X=-117,138.61)がトレンチ内を通る。東西溝SD16401は、推定南一条第1小路中軸線に近いことから、宮域内の区画溝の可能性が高い。

検出された掘立柱建物跡2棟は、いずれも調査地外にのびるため建物の規模は確定できない。掘立柱建物跡SB16405は、蛇行する溝SD16410および周辺の傾斜地を黒灰色土・暗灰褐色土層で整地した後に建てられたことが判明した。黒灰色土層の下から検出した土坑SK16409から緑釉唾壺が見つかり、周辺でミニチュアカマドも出土していることから、建物を造る以前に何らかの祭祀が行われた可能性がある。掘立柱建物跡の前後関係はわからない。

今回の調査で、長岡京の西端、標高40m以上の丘陵地まで、長岡宮の造営が実施されたこと、緑釉唾壺や多量の軒瓦が出土する等の貴重な資料を得ることができた。そして、丘陵地においても遺構が存在することが判明し、今後周辺の調査に期待がもてる。

(石尾 政信=当センター調査課調査員)

注1 山中 章「長岡宮跡第82次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集向日市教育委員会) 1979

昭和60年度発掘調査略報

7. 河 守 遺 跡

所在地 加佐郡大江町河守391 ほか
調査期間 昭和60年5月20日～10月18日
調査面積 約1,650m²

はじめに 今回の調査は、宮福線建設に伴い実施したものである。

河守遺跡は、由良川と宮川とによって形成された沖積地にあり、標高10～11mを測る。遺跡のある河守地区の耕地地割を見ると、東西南北の方位に沿ってほぼ一町(約109m)角の碁盤目状に区画されていることに気が付く。このような地割は、古代の耕地区画整理として施行された条里制の耕地地割を踏襲したためと考えられる。この河守地区の条里制遺構は、昭和55年の調査によって発見されたものである^(註)。また、周辺には遺物の散布もみられたため、条里制地割りの施行に先行する遺跡の存在も予想された。

調査概要 調査は、条里制地割に伴う遺構・遺物の検出および条里制地割施行前の遺構・



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

遺物の検出を目的として、16か所に試掘トレンチをいれた。全般的な土層の順序は、耕作土・赤褐色土・灰色粘質土・青白灰色粘質土であった。2地区から4地区にかけては、青白灰色粘質土上に砂利の堆積した部分が認められた。掘削は、赤褐色土までを重機によって排除し、青白灰色粘質土の上面までを人力により行った。地表面から青白灰色粘質土の上面までの深さは、1～1.5m程度であった。

調査の結果、条里制地割に伴う遺構として杭列を検出し



第2図 河守地区耕地地割 (1/5,000)

た。条里制地割施行前の遺構については、検出することができなかった。出土遺物は、奈良・平安時代の土師器・須恵器が大半を占めた。

検出遺構 杭列を検出したのは、2・3A・3B・9・10の各トレンチである。特に、農道部分の掘削を行った9トレンチおよび10トレンチの杭列は、現在の農道下に埋没した古い畦畔に伴うものであった。したがって、現代に残る河守地区の条里制地割は、昔からの地割を踏襲したものと見える。しかし、条里制地割が施行された時期については、明確な資料を得ることができなかった。部分的に認められた砂利の堆積は、自然の流路に伴い形成されたものと思われ、比較的多くの遺物を包含していた。

出土遺物 遺物のほとんどは、奈良・平安時代の土師器・須恵器であり、大半が2地区および3地区から出土した。これらの遺物は、灰色粘質土や砂利層から木片などとともに出土したが、磨滅したものは少なかった。このことは、遺物が、極めて近い場所から流れ込んだ状態を示しているものと思われる。調査地は、全般的に湿潤であったため下駄や杭・漆器などの木製品も遺存していた。また、上記の時代以外にも弥生時代、古墳時代、鎌倉・室町時代の遺物が出土している。

遺物のなかには、墨書土器(文字は判読できない)や格子叩きを施した布目瓦、中世以前のものと考えられる銅鈴や雁股型の鉄鏃など京都府北部地方において、極めて出土例の少ないものも含まれている。

まとめ 以上の成果から、調査地の付近に現在もその姿を留める基盤目状の土地区画は、条里制地割を踏襲したものであることが確認された。したがって、この付近は、古くから整理された耕作地であったものと思われる。また、2地区および3地区での遺物のあり方は、調査地の西方に接して集落が営まれていたことを示すものである。弥生時代以降、各時期の遺物が出土していることから、この集落はほぼ連続して存在していたものと考えられる。今回の調査では、明確な遺構こそ検出できなかったが、集落遺跡の不明な点が多かったこの地域を考える上で貴重な資料を提供したと言えよう。

なお、今回の調査で検出した杭列のほとんどが現在の畦畔の下部に当てっており、畦畔や水路を作るための施設と考えられる。しかし、発掘調査の段階では、杭列が打ち込まれた時期を明確にすることはできなかった。杭列が条里制地割に伴うものであることは明らかで、今後他の地域で同じような杭列が確認されることも予想される。今後、類例の増加を待ち、検討を加えてゆくことにしたい。

(三好 博喜)

注 芦田忠司「大江町の条里制遺構」(『大江町誌』通史編 上巻) 1983

8. 土師川改修関係遺跡

所在地 福知山市長田878-2
 調査期間 昭和60年9月26日～11月13日
 調査面積 約150m²

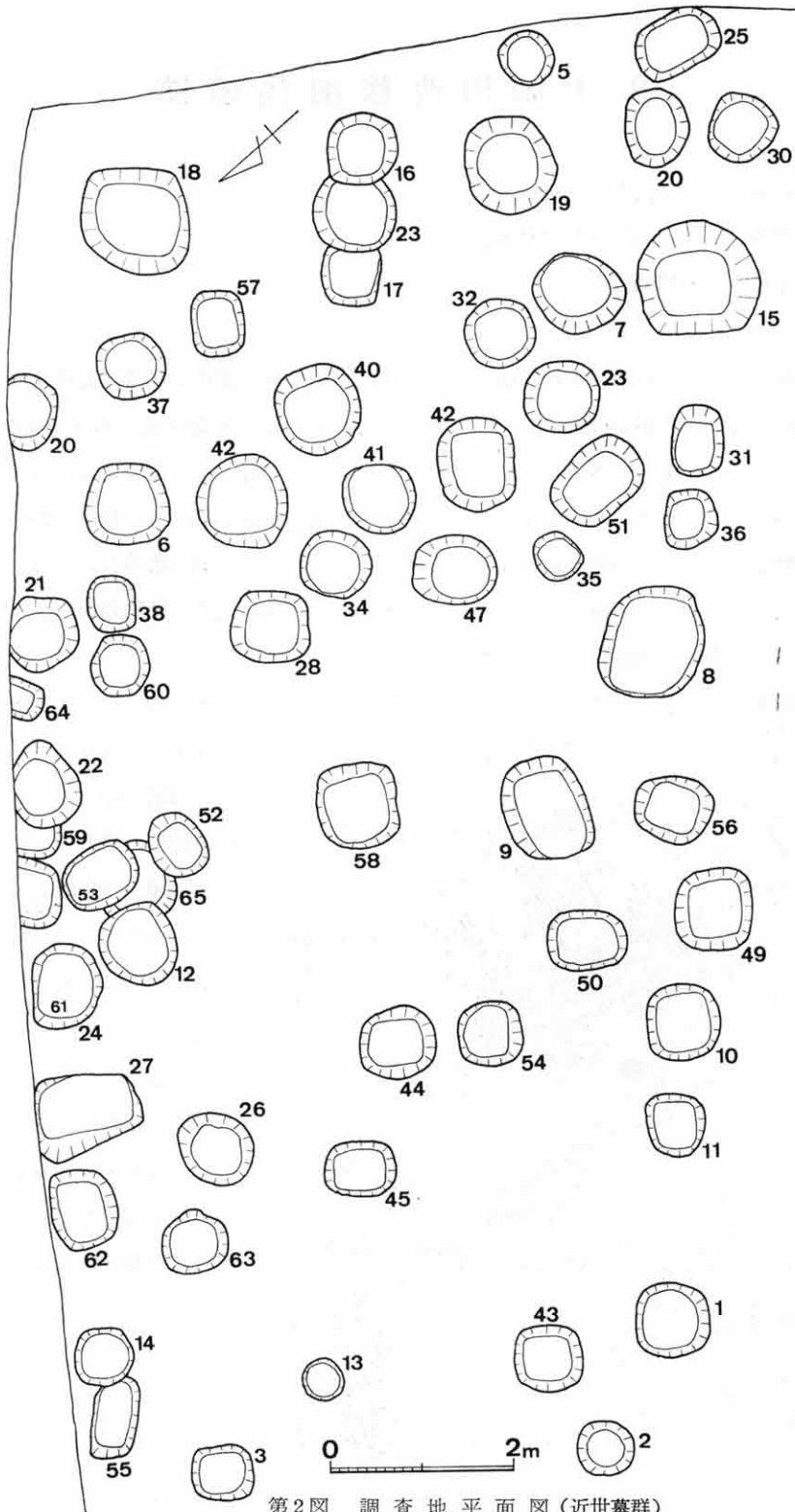
はじめに この調査は、土師川改修工事に伴う事前の発掘調査である。改修工事は、調査対象地部分で、延長約600mにおよぶが、その大部分は、昭和59年度に調査を実施し、本年度は、昨年に調査のできなかった1か所について調査を行った。調査地は、日本海に流入する由良川の支流である土師川によって形成された沖積地に立地し、標高約29mを測るが、土師川の水面からは約3mの比高差である。この場所は、旧石器時代、あるいは縄文時代草創期に比定される削器をはじめ、弥生・古墳・奈良時代等の遺物が出土した和田賀、前ヶ嶋、仲堤遺跡の範囲に入る。

調査概要 近世まで墓地であり、地元で「塚」であるとの伝承も残る今回の調査地は、水田中に島状に小高くなっていた。調査は樹木伐採後、表土を除去し、精査した結果、近



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

世の墓塚を65基検出した。形状は円形、隅丸方形のものが多く、径0.4～1.2mを測る。本来、木棺が用いられていたことが、出土する釘の存在から類推できるが、棺材は遺存していなかった。人骨の遺存する墓塚も比較的多く、副葬品には、人形・銭・煙管・土師器小皿・陶器などがある。埋葬は江戸時代以降、数時期にわたって行われている。その他の遺物として、数点の須恵器が出土しているが、磨滅が激しく、流れ込んだものと考えられる。(長谷川 達)



第2図 調査地平面図(近世墓群)

9. 綾 中 遺 跡

所在地 綾部市西町
 調査期間 昭和60年4月19日～10月15日
 調査面積 約1,550㎡

はじめに 今回調査した綾中遺跡は、国鉄綾部駅の北東方数100メートルの市街地の中に位置している。近隣には奈良前期の寺院跡である綾中廃寺や、それとほぼ同時期の集落跡である青野遺跡があり、遺跡の密集地帯を形成している。今般、この地に府営住宅が建設されることになったため、事前調査を実施した。

調査は、トレンチ掘りで行い、必要に応じ一部拡張して実施した。この結果、後述するように弥生時代から鎌倉時代まで断続しながらも人が生活した場所であることが判明した。

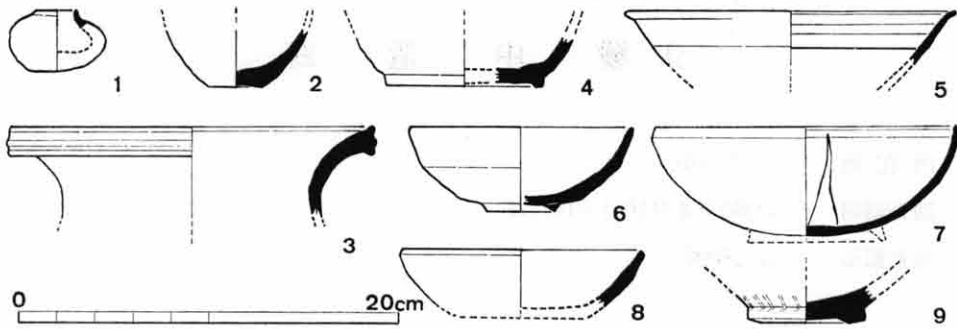
調査概要 4棟分の建築予定地内に6か所のトレンチを設定し調査した。その結果、2棟分については面的な調査を行い、他は部分的な調査を実施した。その後、調査地北部で来年度予定されている3棟分の建築予定地内に5か所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。以上の調査の結果、次のような事実が判明した。

調査地の南部は、南東から北西へ徐々に低くなっており、等高線に沿うようなかたちで



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

溝を2条検出した。遺物の中心は、平安時代末から鎌倉時代にかけての土師器皿と瓦器碗で、ほかに少量の弥生土器や奈良時代の土師器甕などがある。調査地中央部との境あたりは、もっとも低く、字切り図などを参照すると、旧河川の存在が推定できる。中央部北半から北部にかけては、微高地の部分(西半)と低湿地の部分(東半)とに分かれることが判明した。低湿地部分の広がり、近隣で行われた綾部市教育委員会の調査によって東端が確認され、約100メートルであることが判明した。微高地部分については、今年度は試掘調査のみであるので明確ではないが、掘立柱建物跡2棟の東端を確認した。また、溝や土坑



第2図 出土遺物実測図

も多数確認しており、西に広がる集落の一端を検出した。時期は平安時代末から鎌倉時代である。

出土遺物でもっとも多いのが中世に属するもので、ほかに弥生時代中・後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代中・後期、鎌倉時代のものが少量ある。

(1)はミニチュアの壺、(2)は底部片でいずれも弥生時代後期と思われる。(3)は壺で、同時代中期のものである。(4)は須恵器の杯で奈良時代後期のものであろう。(5)は灰釉陶器碗で、体部内面に意図的かどうかは不明だが、3条の沈線が認められる。ところどころに釉が付着している程度なので、退化型式とみることができる。灰釉から灰釉系(山茶碗)へ変化する11世紀頃のものであろうか。なお、灰釉陶器は綾部では初の出土例である。(6)は小振りの瓦器碗で、鎌倉時代中期のものであろう。(7)はほぼ完形の瓦器碗である。軟質であるため内外面の剝離は激しいが、かろうじてミガキが認められる。また、内底面にはジグザグ状暗文が施される。平安時代末期のものであろう。(8)は土師器皿である。口縁端部を「面取り」したもので、鎌倉時代前期か、あるいは平安時代末期かも知れない。(9)は白磁碗の底部片である。玉縁状の口縁部をもつタイプで、(8)と同時期であろう。

まとめ 集落の中心を掘った調査ではないが、いくつかの新知見と今後の課題を提供した調査であった。まず、古地形の復元を可能にする成果が得られた。調査地の中央には、かつて河川があり境となっていたこと、東は低湿地のため生活した場所は更に東か、西へ求めていたことなどが推測できること、このため、今後西方(北西)の調査結果がまたれることとなった。

また、遺物を見ると、弥生時代の集落が近隣にある可能性がでてきたことが注意される。庶民では持ち得ない灰釉陶器の使用者の解明や、もっとも多く出土する中世遺物から考えて、今後当時の集落が近隣で発見できる可能性が非常に高いことなどが、推測できるようになった。

(伊野 近富)

10. 味 方 遺 跡

所在地 綾部市味方町中ノ坪
 調査期間 昭和60年8月5日～10月5日
 調査面積 約400m²

はじめに 今回の調査は、国道173号線の新丹波大橋橋梁新設工事に伴うもので、昭和59年12月13日から3月30日まで実施した昨年度調査を引き継いでいる。

味方遺跡は、縄文・弥生時代の石鎌やサヌカイト剥片・弥生土器、古墳～奈良時代の須恵器・土師器の散布地として知られ、由良川が綾部盆地に入る手前で西から北へ大きく流路を変える屈曲部右岸に位置する。昨年度の調査では、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝墓状遺構・溝・柵列・大小の土坑、及びピット等の遺構を検出した。今回の調査ではさらにそれらの面的な把握につとめた。

調査概要 今回の調査は、昨年度調査地のうち、遺構の集中しているところを道路建設予定幅いっぱいまで拡張して行った(約400m²)。昨年度調査の遺構検出面を参考に、約40～80cmを重機によって除去し、以下を人力によって掘削した。その結果、次のような遺構を検出した(主要な遺構のみに限定してあげる)。

弥生時代 円形竪穴式住居跡SB176(昨年度調査で約3分の2を検出済み)、溝SD208・土坑SK203

古墳時代 方形竪穴式住居跡SB139・SB150・SB201(SB139・SB150は昨年度の調査で煙道部付近を検出している)

歴史時代 2間×2間の掘立柱建物跡 SB205・溝SD206

これらのうち、SB150は一片約8mもあり、中丹地方では最大級である。壁高は最もよく残っている地点で約40cmを測り、極めて残りのよいものであった。住居跡が凹地状の地形の最低部にあったため、後世の削平をまぬがれたと考えられる。また住居跡南辺東側の深さ約10cmの掘り込みを中心に、まとまった形で遺物が出土しており、一括資料として扱う



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

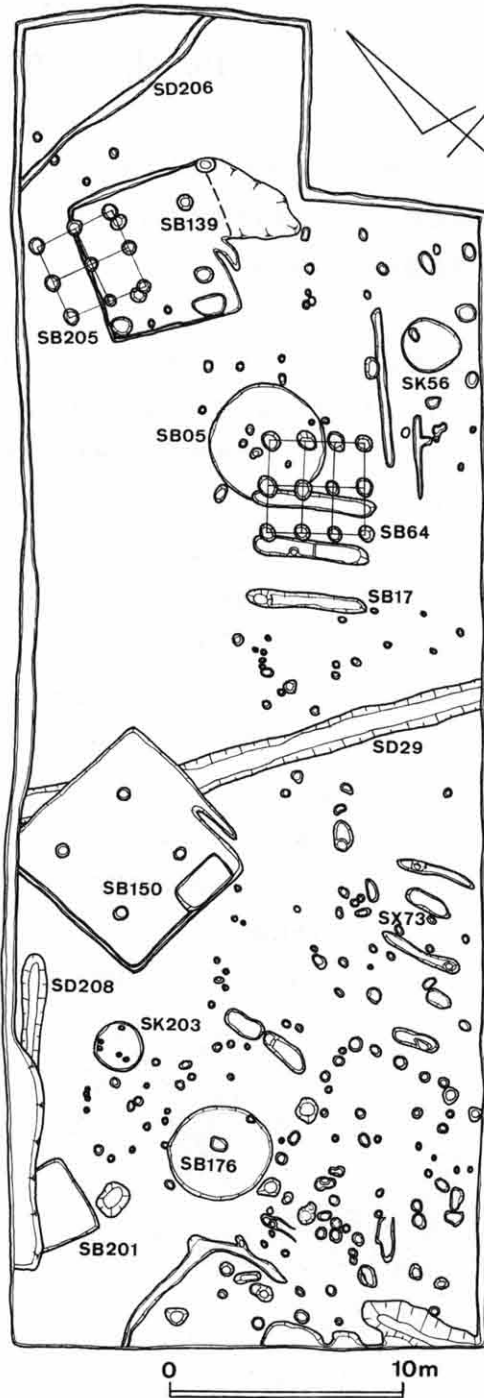
ことができる。

まとめ これまでの調査によって、味方遺跡は縄文時代から中・近世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。今回の検出遺構で重要なものは、古墳時代後期に属する3基の竪穴式住居跡である。SB139・SB150は、ともにカマドを造る際に住居の一部を掘り残して煙道部を設ける、いわゆる青野型住居に類似する。味方遺跡を由良川流域に存在する最上流部の大規模な集落遺跡と考えるなら、その下流の青野遺跡等との関連を十分に検討する必要がある。さらにSB139・SB150が大型の部類に入るのに対して、ほぼ同時期と考えられるSB201が一辺約3.4mしかない。この形態差が何に起因するのか、今後考えたい。

これまでの調査によって、味方遺跡について多くのことが明らかとなった。しかし、今回の調査地は遺跡のほんの一部にしかすぎず、集落の中心は調査地の東側にありと推定されるので、その意味からも、今後注目すべき遺跡である。

(西岸 秀文)

〈参考〉 辻本和美「17. 味方遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985.3



第2図 遺構平面図

11. 上 中 遺 跡

所在地 北桑田郡京北町大字下中小字鳥谷小迫口12・13番地
調査期間 昭和60年5月13日～9月14日
調査面積 約630㎡

はじめに この調査は、京都府立北桑田高等学校の林業科校舎新築工事に先だち行ったものである。学校周辺は、以前から弥生時代前期・後期の土器片や半磨製石槍が出土することで知られている。さらに、扁平鈕式袈裟襷文銅鐸(弥生時代中期)が弓削川左岸の丘陵地である下弓削から、文久元(1861)年に出土したと伝承されており、この地に銅鐸祭祀を行った地域集団が生成されていたことが窺われる。

上中遺跡の調査は、今回で3回目になる。昭和58年度の格技場新築工事に伴う第1次調査では、古墳時代前期の川跡・土塚・柱穴状掘り込み2か所を検出し、古墳時代前期～鎌倉時代にわたる遺物が出土した。昭和59年度の林業科実習棟新築工事に伴う第2次調査では、顕著な遺構が認められず、自然流路跡と時期不明の溝2条を検出したにすぎない。また、遺物もほとんど出土しなかったことから、この付近を上中遺跡の北端と考えるに至った。

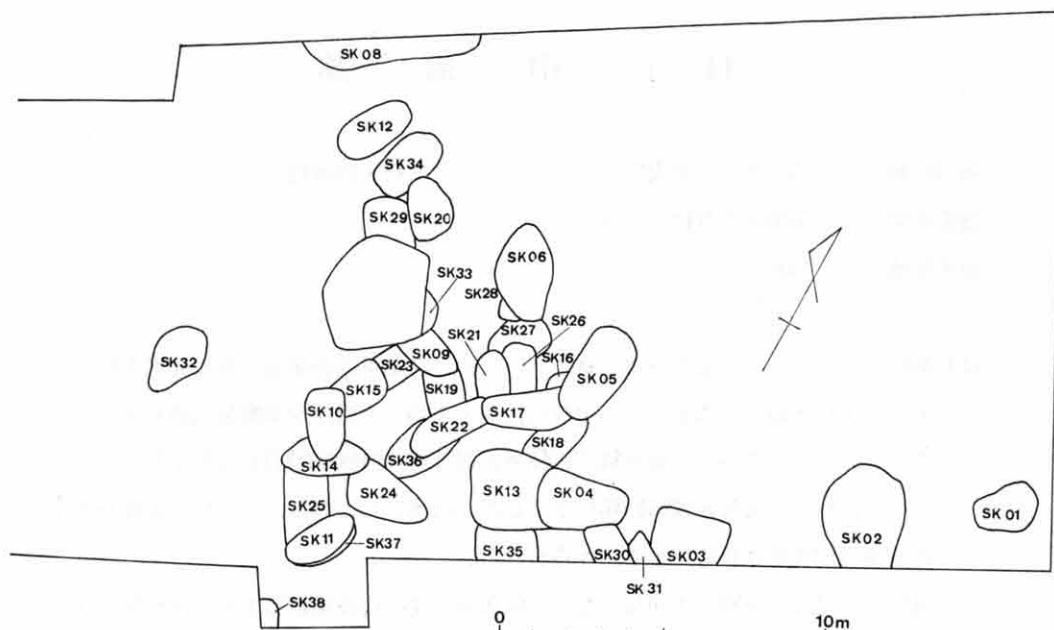
今回の調査地は、第2次調査地から南東へ50mの位置にあたり、周辺でかなりの遺物の散布が認められる所なので、何かの遺構が存在するものと期待された。

調査概要 調査は、41m×15mのトレンチを入れ、表土を重機で掘削した後、表土下50cmからは人力により掘り下げた。その結果、表土下約60cmのところでは黒褐色土層から掘り込まれた土塚群(38基)を検出した。

土塚は、不整形・隅丸長方形を呈し、大半の土塚が切り合い関係を持つため、その一部が消失してしまい、当初の正確な規模が明らかでないものが多い。比較的原形を保つものの平均値は、長軸2.4m・短軸1.3m・深さ60cm前後である。各土塚の主軸は一定しないが、約半数は南北方向に置いている。土塚埋土は、黄褐色粘土・灰白色粘土・黒色土の混合土からなっている。土器は、この埋土中に



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



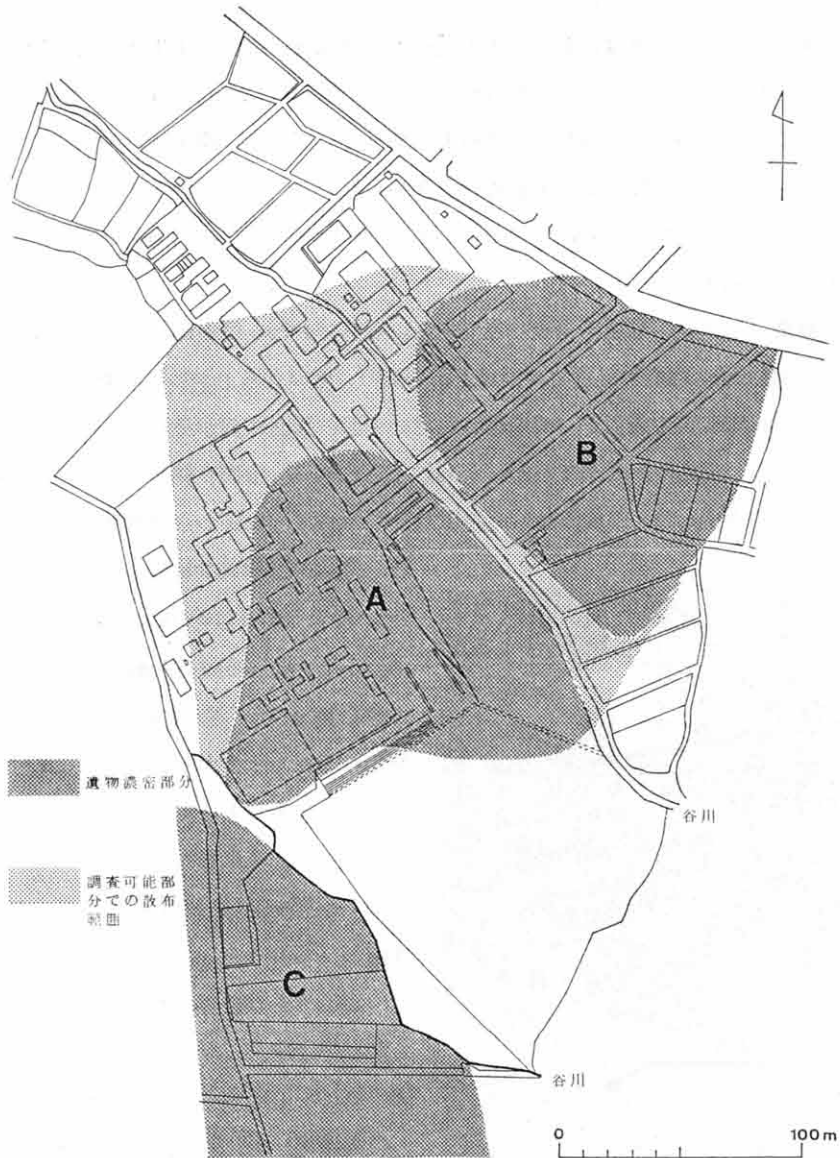
第2図 遺構平面図

破碎された状態で埋まっており、完全に破碎され小破片として埋まっているものと、ある程度原形をとどめるものの2種類がある。土塚によって差があるが、土塚内中央部に置くものは概して小破片が多く、埋土中の各所にみられる。一方、土塚壁及び隅に置くものには、底部を下にし体部下半を据えるもの(SK10・29)、口縁部を上にし体部上半を据えるもの(SK11・24)の二種類がある。底面に置くものには、大型破片や一個体単位でのまとまりが見られる。なお、ほとんどの土塚壁面が袋状になっていたり、床面の凹凸のかなり激しいものが大半で、底面近くに土器を置いたものには、袋状の壁面や凹凸の底面は見られない。

調査の結果、出土した遺物は、古墳時代前期～江戸時代にまでわたるが、そのほとんどが旧表土・床土の中から出土したもので、石器剥片・須恵器・土師器・瓦器・青磁片・土錘などがある。土塚内からは多数の土師器が出土したが、いずれも壺と甕で、1点のみ台付壺の脚片があるが、大半が甕である。土器以外では、SK11・24などから板材と思われる木製品も出土した。時期的には、庄内併行期～布留併行期と考えられる。

まとめ 今回の調査では、土塚38基を検出したが、出土遺物による限り、これらは古墳時代前期初頭に相次いで営まれたものと考えられる。これらの土塚の性格を明確にすることはできないが、大半の土塚が袋状になっている点に注意される。袋状部分は先端の尖った棒状のものでえぐられており、断面を観察すると、本来ブロック状にある灰白色粘土のみがえぐられたような状態を示している。従って、これらの土塚は採土穴であった可能性

も考えられる。しかし、土器が各土塚に散乱していることから、本来土塚墓があった所を、後になって採土穴ができた際に散乱し埋まったとも考えられる。このことは、袋状土塚に対して、底面・壁面とも整然としたものが存在することからも窺われるが、現段階ではいずれとも断定することはできなかった。この土塚群の範囲・方向については、土塚群が旧地形の山裾に沿って造られており、その範囲はさらに東西方向に広がっている可能性があり、今後注意を要する。
(増田 孝彦)



第3図 遺物散布図

12. 篠・袋谷 1 号 窯

所在地 亀岡市篠町森小字前山
調査期間 昭和60年7月1日～11月22日
調査面積 約120m²

はじめに 袋谷1号窯は、老ノ坂・亀岡バイパス建設に伴う工事用道路用地内の試掘調査の際に発見したものである。昭和51・55年度に調査された前山窯跡群の北西約300mに位置し、袋谷池に通じる狭い谷筋の西側斜面に構築されており、篠窯跡群の西端にあたる。分布調査の際に、この付近から須恵器片が採集されたが、今回の調査によってその窯跡の位置が明らかになった。なお、この窯は小字前山に所在するが、前山窯跡群と区別するため、袋谷窯と名付けた。

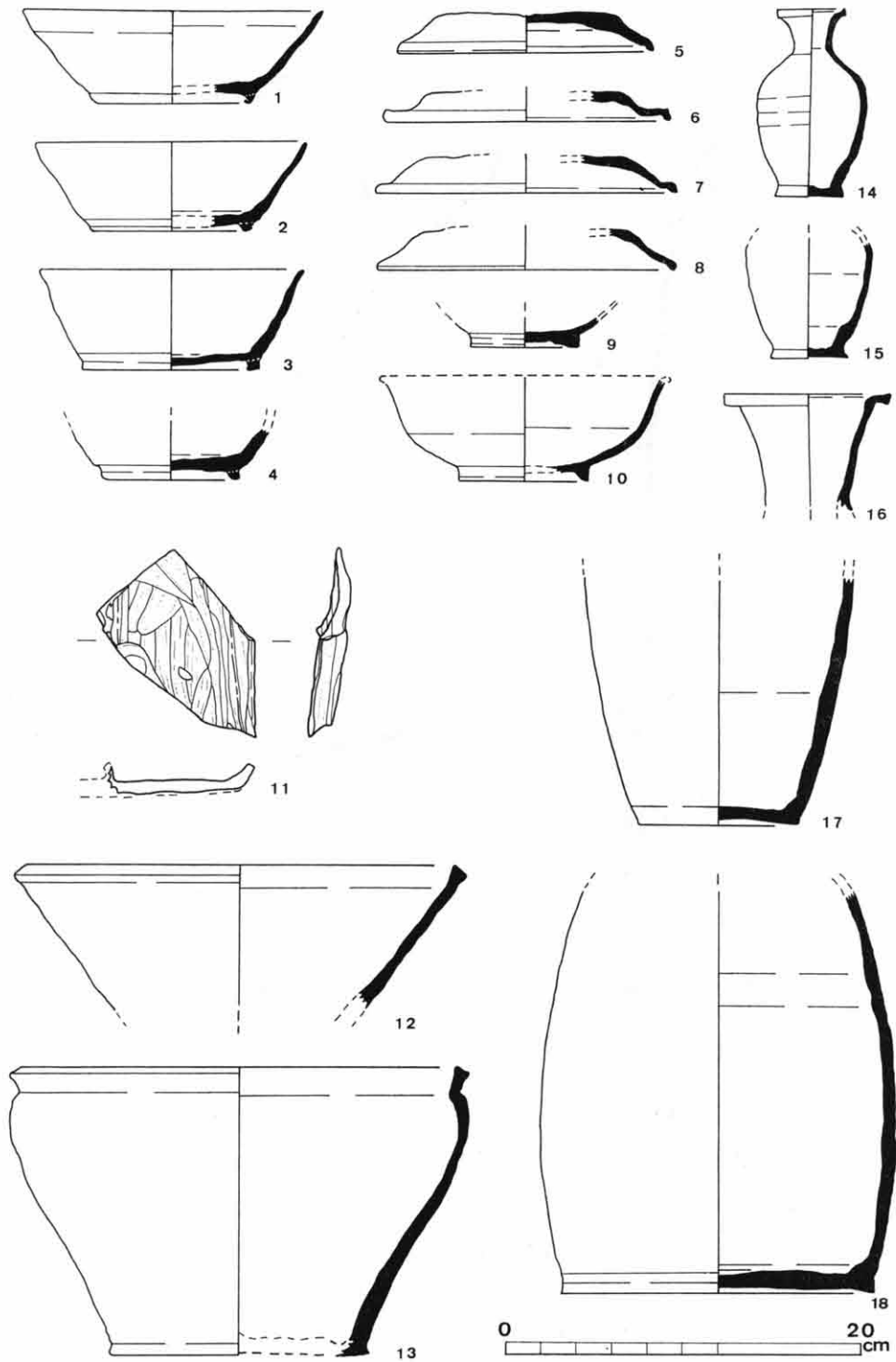
調査概要 窯体は、半地下式登り窯である。残存長4.7m、煙道部付近での幅0.6m、焼成部の最大幅1.2m、燃烧部付近での幅は1mを測り、壁の立ち上がりは約20cm残っている。この窯跡では焼成部の床面が一部補修されているが、床面や壁がそれほど焼けしまっていないことから、短期間の操業で終わったものと思われる。床面の傾斜角度は、第3図のB-B'付近で傾斜が変わり、燃烧部からその地点まで約23度、B-B'から煙導部まで約38度を測

る。床の厚さは約4cmで、焼土は約6cmである。焼土の厚さは約10cmで、青灰色に焼けている部分の厚さは約4cmを測る。灰原の厚さは約40cmで、谷底に堆積していた。旧地形からみて、その大半は流されたものと思われる。また、袋谷1号窯の灰原の下層から拳大の礫とともに須恵器片が多量に出土した。これは1号窯操業以前のもので、山手から流れ堆積したものである。1号窯南側約10mの所を砂防工事する際に、多量の須恵器片を発見したという地元の方の話から、1号窯南側に別の窯跡が1基以上存在したと思われる。

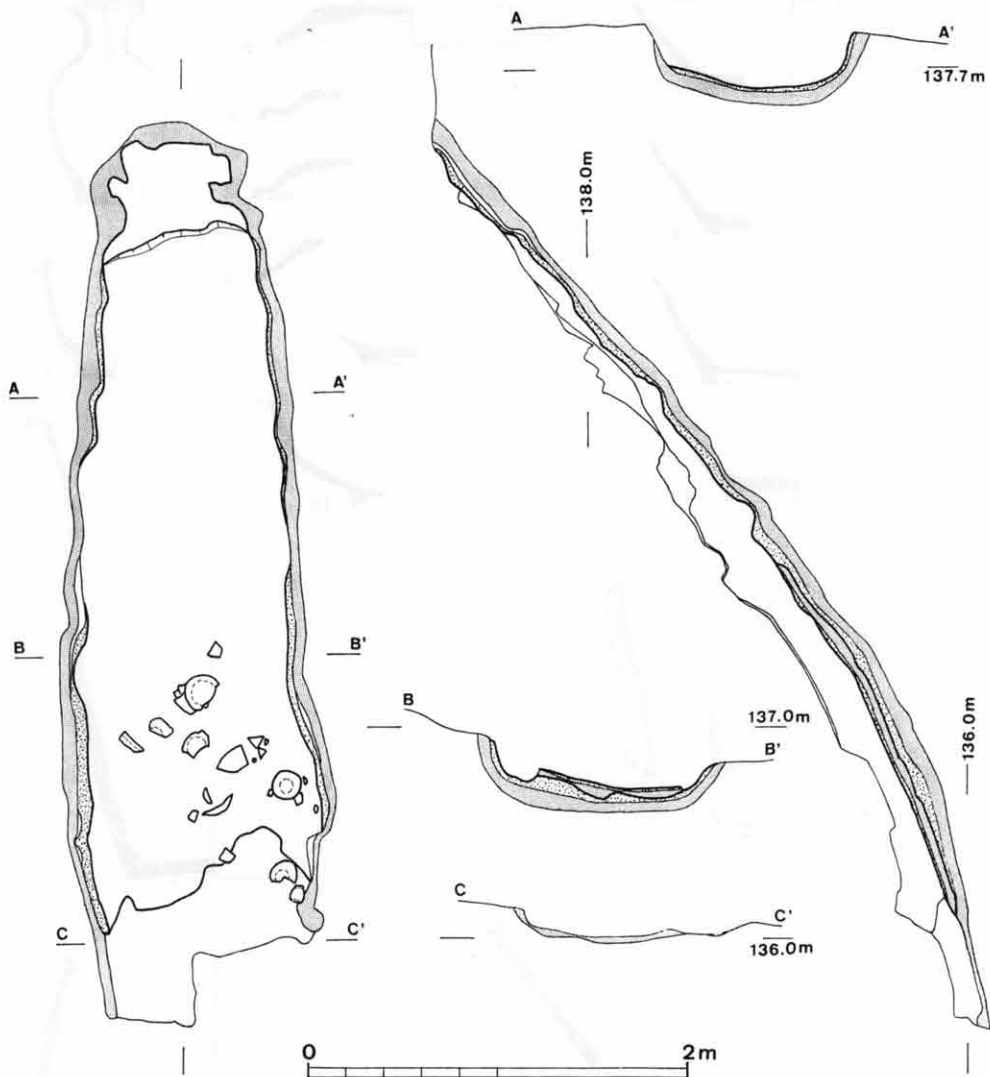
出土遺物 第2図に図示した遺物は、袋谷1号窯が位置する谷筋の試掘調査時に出土し



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 出土遺物実測図



第3図 袋谷1号窯実測図

たもので、1号窯とその南側の窯跡に伴うものである。1号窯の窯体内及び灰原から出土した須恵器は、現在整理中であるため、概報で紹介することにした。今までのところ、袋谷1号窯とその南側にあると推定される窯出土遺物には、それほど特徴の差はなく、ともに9世紀中葉と考えられる。杯は底部外縁を高台が巡り、蓋にはつまみがなく、比較的肩部のはる瓶子が出土している。また、杯や壺類の外面に「メ」のヘラ記号を施したものが数点見つかっており、壺や鉢が比較的多く出土していることも、袋谷窯跡の一特徴になるものと思われる。

(岡崎 研一)

13. 燈籠寺遺跡

所在地 相楽郡木津町内田山
 調査期間 昭和60年7月29日～10月8日
 調査面積 約380m²

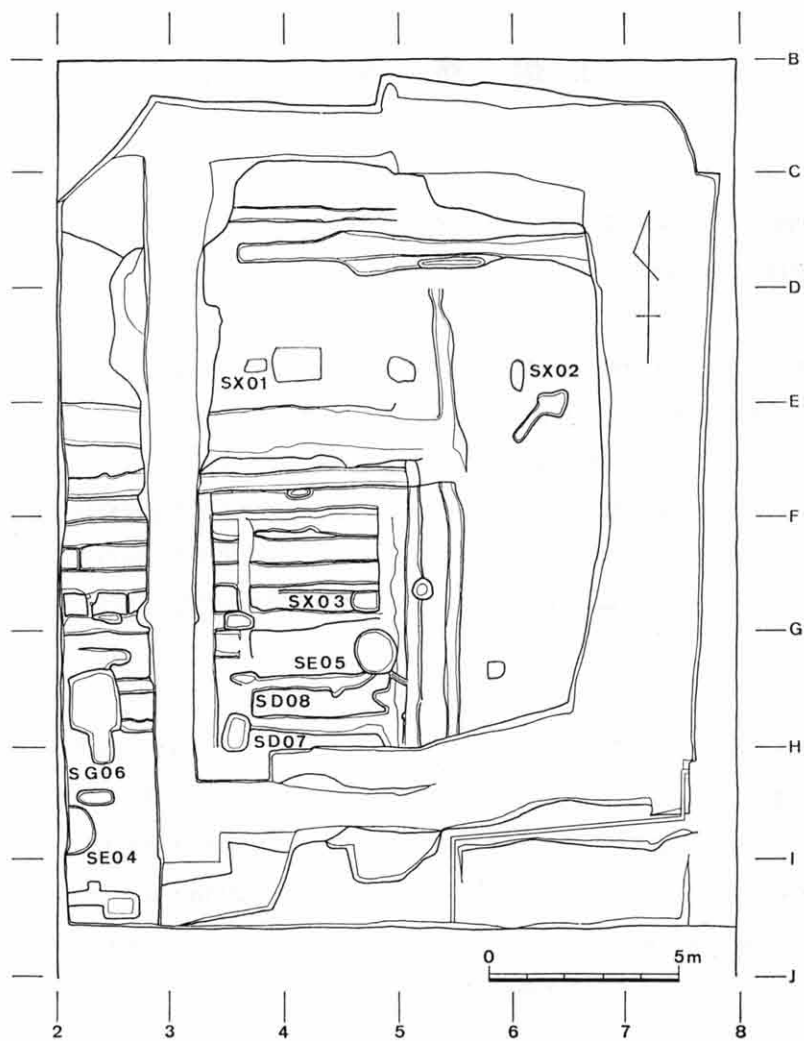
はじめに 相楽郡木津町の東部丘陵は、木津川が北を限り、南を奈良山によって限られている。燈籠寺遺跡は、この丘陵の北西に位置する。当地は、府立木津高等学校農業課の畜舎や校舎が建ち並ぶ標高50～60mの丘陵先端部にあたり、遺跡の範囲はさらに北側の沖積平野に所在する燈籠寺廃寺に及ぶ。今回の調査は、府立木津高等学校格技場の建て替え工事に伴うもので、調査地は南北にのびる丘陵から東へ張り出す小丘陵の先端部付近にあたる。当地域では、昭和56・59年度調査によって5世紀前半～中頃にかけて古墳が営まれたこと、奈良時代の遺物が散布すること、江戸時代に畑地として土地利用されたことなどが明らかになっている。また、昭和33年に丘陵北端部で同校の農場が造成されたとき、弥生時代前・後期の土器、5世紀末～6世紀頃の古墳と考えられる遺構等が確認されている。

調査概要 調査は、現存格技場解体後、重機によって表土層及び攪乱土を除去し、その後、人力によって精査を行った。調査で確認した遺構は、畑の畝状遺構・ため池・井戸・水路・動物を埋葬した土坑である。畑の畝状遺構は、幅10～20cm・高さ5～10cm程度の高まりを約60cm間隔で8条、東西7～8mにわたって検出した。ため池(SG06)は、畝状遺構の南西寄りで検出した。広さ2.0m×1.3m・深さ0.5mを測り、南側に0.5m×0.3m・

深さ0.3mの突出部がある。池の底には檜皮が葺かれており、保水性をよくしたものかと考えられる。井戸は、ため池の南(SE04)と東(SE05)で2基検出した。SE04は、直径1.28mの円形を呈し、深さ0.9mを測る。昭和59年度調査で検出したものと同様、内面に漆喰を塗っている。SE05は、直径1.1mの円形を呈し、素掘りである。深さは1.8mを測る。水路(溝)は、いずれもため池(SG06)から流れ出し、井戸(SE05)に流れ込むもの(SD08)と、これに並行して



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遺構平面図

東へ流れるもの(SD07)の2条を検出した。SD08は、幅0.8mあり、7.0mにわたって検出し、SD07は、幅0.48mで、7.1mにわたって検出した。これらの溝は、いずれも深さ5.0mを測る。動物を埋葬した土塚は、計3基確認した(SX01・02・03)。SX01は、広さ0.6m×0.3m・深さ0.1mを測り、土塚内から頭蓋骨、脊椎骨が出土した。SX02は、広さ0.7m×0.3m・深さ5.0mを測り、土塚内から有蹄類と考えられる動物の足の部分の骨が出土した。SX03は、広さ0.7m×0.5m・深さ0.2mを測り、土塚内から長関骨が出土している。

まとめ 今回の調査で検出した畝状遺構・ため池・井戸・水路は、近世以降の畑作に関するものである。また、3基の獣骨を埋葬した土塚は、それ以降に掘り込まれたものである。今回の調査では、弥生～古墳時代の遺構は検出しえなかった。(戸原 和人)

資 料 紹 介

亀岡市千代川遺跡出土の壺形土器<図版2参照>

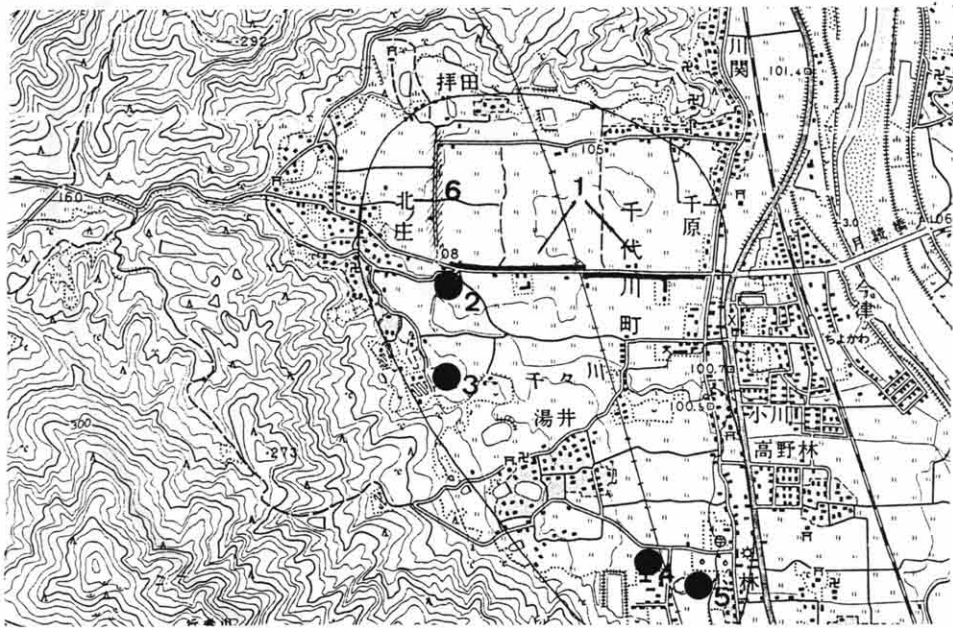
—弥生時代中期に用いられたタタキ原体の一例—

田 代 弘

1. はじめに

千代川遺跡は、亀岡盆地の西端にある行者山北東麓に展開する扇状地上を占める集落遺跡である(第1図)。遺跡の範囲には丹波国府や桑寺廃寺推定地を包括しており、広大な面積を有している。これまでの11次にわたる調査の結果、弥生時代から鎌倉・室町時代にかけての種々の遺構・遺物が検出され、長期にわたって遺跡が形成されたことが明らかにされた。

ここに報告する土器資料は、当調査研究センターが1983年度に実施した第6次調査において検出したものである。この土器の器体には特異なタタキ成形痕が認められる。現状では類例に乏しいと思われるので、主にタタキ成形痕についての観察結果を記し、紹介しておきたいと思う。



第1図 千代川遺跡調査地位位置図 (1/25,000)

- | | | |
|------------|------------|---------------|
| 1. 第6次調査地点 | 2. 第1次調査地点 | 3. 第2・第5次調査地点 |
| 4. 第4次調査地点 | 5. 第3次調査地点 | 6. 今年度調査地点 |

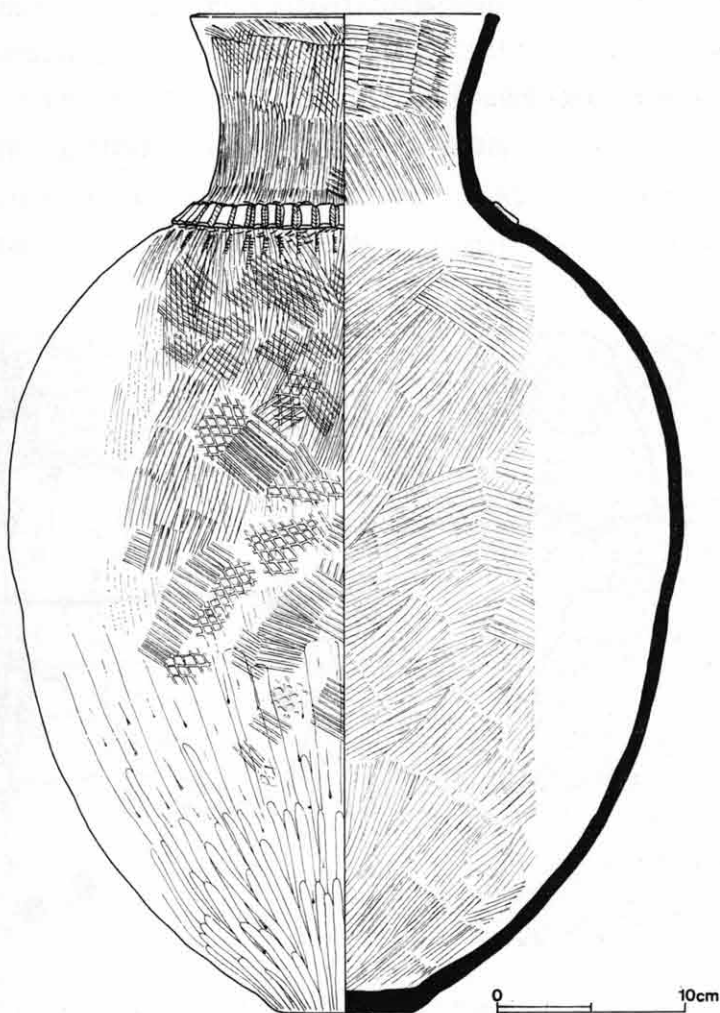
なお、第6次調査では、亀岡盆地における弥生時代中期後半の大規模な集落を初めて具体的に明らかにしたほか、桑寺廃寺・丹波国府の存在を裏付ける資料を得るなど数多くの成果をおさめている。^(注1)

2. 遺物について

当該資料は、弥生時代の集落推定地区の西側を区切る溝を掘削した際、中期後半の多量の土器とともに一括して検出された。溝は断面逆台形を呈し、水流の痕跡が認められない事などから、環濠の一部と考えられている。遺物の残度は良好で、ほぼ完形に復元することができた。

当該土器は、胴長の体部から頸部が内湾ぎみに伸び、緩やかに外反しながら直立する口縁部を持つ壺形土器である（第1図・図版第2）。頸部と体部の境には、ハケ原体による連続刺突文を施した突帯をめぐらせている。全体に裝飾性に乏しく簡素である。底部は器体に比べてやや小さく、不安定である。第Ⅳ様式に比定されるものであろう。

成形は指おさえとタタキを基本とし、その後、外面を体部上半につい



第2図 遺物実測図

てはハケ、下半にヘラ削りを施し、部分的にヘラミガキを行って最終調整としている。内面は肩部以下を斜行するハケ調整で丁寧に仕上げる。胎土は、きめの細かな粘土素地を用い、粒径1mm程度の長石・石英粒を多量に含んでいる。灰褐色を呈し、焼成は良好である。体部外面には上述のように部位によって調整の過程に粗密があり、タタキ痕は上半から最大腹径部にかけて残度が良好であった。

器表外面に見られるタタキ痕には二種の文様がある。ひとつは平行タタキ、もうひとつは格子目タタキである。割合からみると平行タタキが多く、格子目は散発的である。

これらは文様の構成を異にしているため、一見すると別々に施されているようにみうけられる。事実、巨摩・瓜生堂遺跡出土例^(注2)では同一器体に両者の文様が共存しており、このことを裏づけているが、当例では細かく観察すると、必ずしもすべてについて別々の原体を用いたものではないことがわかる。すなわち、それぞれの文様の末端部に注目すると、平行タタキ目は格子目タタキを構成する平行斜線に二本一組で規則的に接続していて、接続部分がX字状を呈していることが理解される(図版第2)。さらに、図版第2一(2)に示す痕跡は、平行タタキ単位分の両側に格子目が接続することを窺わせており、平行タタキ目を中心にして左右対称に格子目を配していることを示している。

最終調整痕の下になって明確にできない部分もあるが、すくなくともこれらの痕跡は、同一原体上に二種類の複数単位の陰刻をほどこしていることを示すものといえる。

3. お わ り に

上述のように、当該土器の器表にみられる格子目と平行タタキは同一原体状に刻まれていることが明らかである。タタキ成形は、畿内では弥生時代中期には既に成立を見る手法で、平行タタキを主体的に活用し、後期においては甕の製作において中心的な役割を担う。弥生時代中期におけるタタキの種類としては、平行タタキ・格子目タタキのほか、流水文・渦巻文などが知られているが、単一文様を反復し、複数単位施すものが一般的である。本例のように、同一原体上に種類の異なる二つの文様を陰刻する例は極めて稀な例といえることができるだろう。成形に用いる原体について考える上で貴重な一例である。

小文を作成するにあたっては、当センター調査員森下 衛より事実関係において教示をえた。また、写真撮影に際し同調査員田中 彰に協力を得た。記し、謝意を表したい。

(田代 弘=当センター調査課調査員)

注1 森下 衛「千代川・桑寺遺跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984.6

注2 『巨摩・瓜生堂』財団法人 大阪文化財センター 1982.8

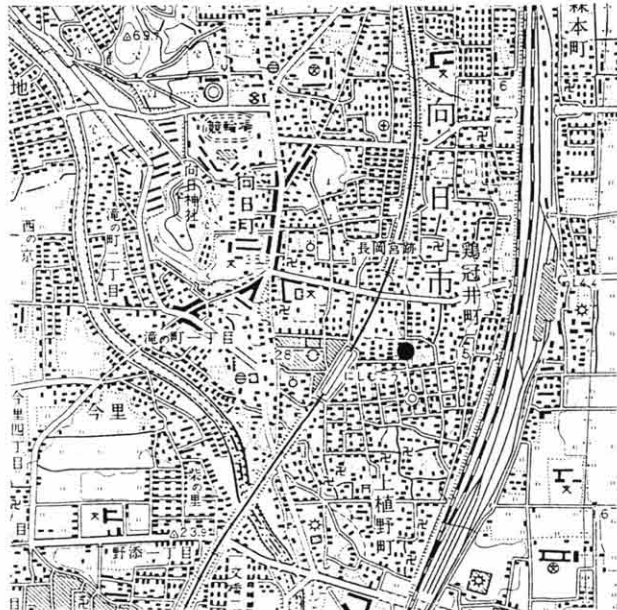
府下遺跡紹介

31. 長岡宮跡築地跡

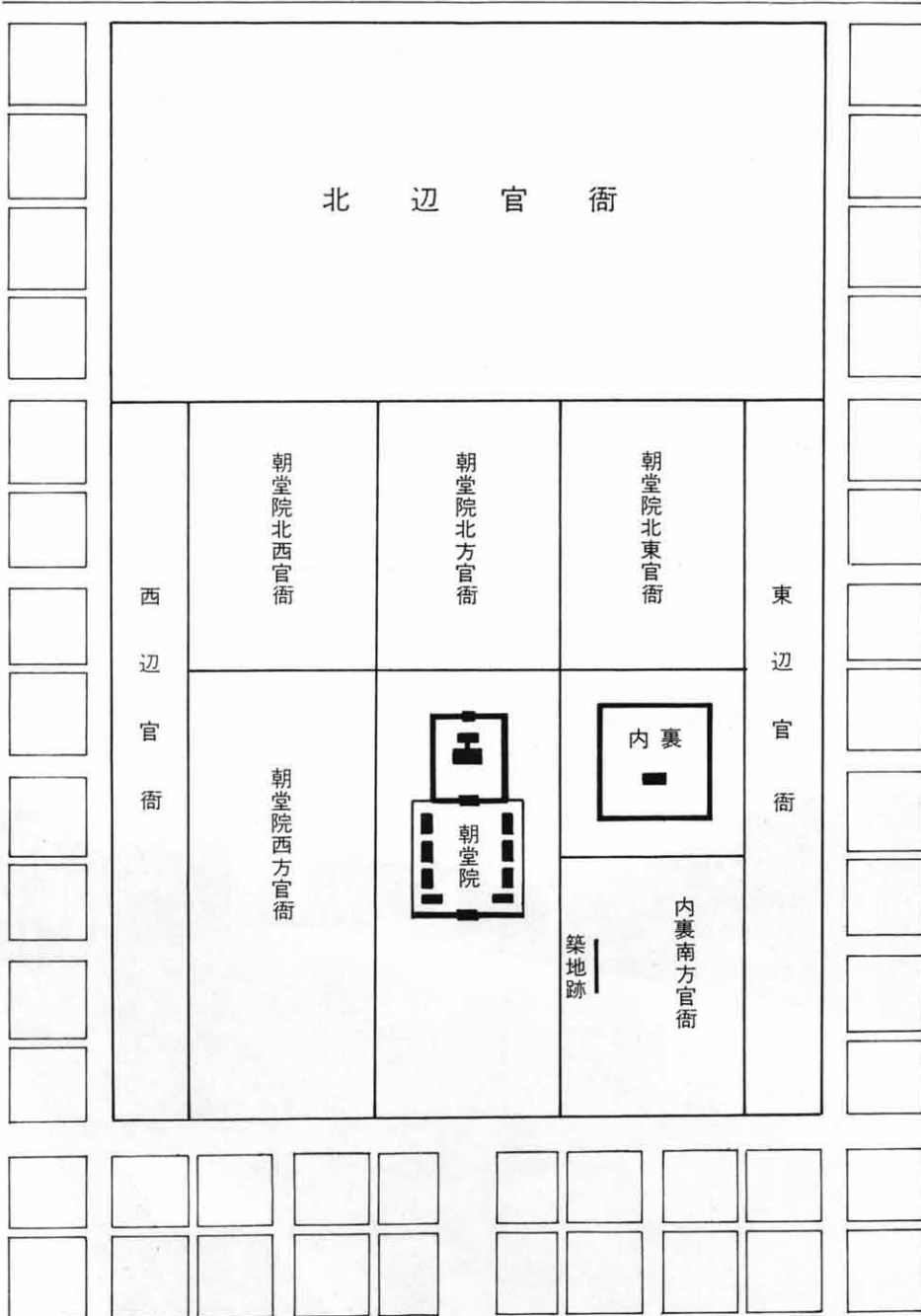
前回、長岡宮大極殿について紹介したが、今回は同じ長岡宮内で見つかった築地跡を紹介したい。

場所は、標高27.0m付近の段丘の裾部にあつて、長岡宮内であれば、内裏の南、朝堂院の南東方向にあたる。この地は、『平安宮大内裏図』によって推定すれば、民部省か式部省の曹司のあつたところで、いわゆる内裏南方官衙地区ということになる。長岡京に都が置かれた時代は、一種の行政改革が行われた時期といわれている。朝堂院が12堂から8堂になったり、平城京・難波京の複都制を放棄したり、各官司の統廃合を実施したことなどがその例として挙げられる。そのため、単に『平安宮大内裏図』だけから推定することはむづかしく、なかなかあてはまらないことが多いので、これが何を示すものかにかかわりに判断しがたい。ここでは簡単に宮内官衙を区切る築地と推定しておく。

発掘調査は2次にわたって行われた。第1次調査が1979年2月8日から3月5日まで、第2次調査が1981年8月24日から12月10日までそれぞれ実施された後、整備工事がなされ現在に及んでいる。検出された遺構は、築地本体(SA8901と呼称されている)・築地基底部の土塁(SA8902)・土塁西側の濠状遺構(SD8903)・築地の雨落ち溝(SD1001)等である。このうち、築地SA8901は、基底幅7尺(2.1m)・現存最大高1.2m・現存長63.0m以上の規模を持つ。場所は、大極殿の中軸から東へ601尺(180.35m)の所で、内裏西面築地回廊心から7.8m西に位置しており、ほぼ軸線をそろえている。また、築地部の両側からは大量の瓦が出土しており、築地が瓦葺きで



第1図 遺跡所在地 (1/25,000)



第2図 長岡宮官衙割付図（『向日市史』上巻をもとに再トレースした。）

あったことを示している。

出土遺物の大部分は、奈良時代後半に属する瓦類で、そのほかは土師器片・須恵器片・鉄釘・石製紡錘車などが出土した程度である。このうち、軒瓦は85点も築地の瓦落ち部から出土しており、報告によれば次のとおりである。

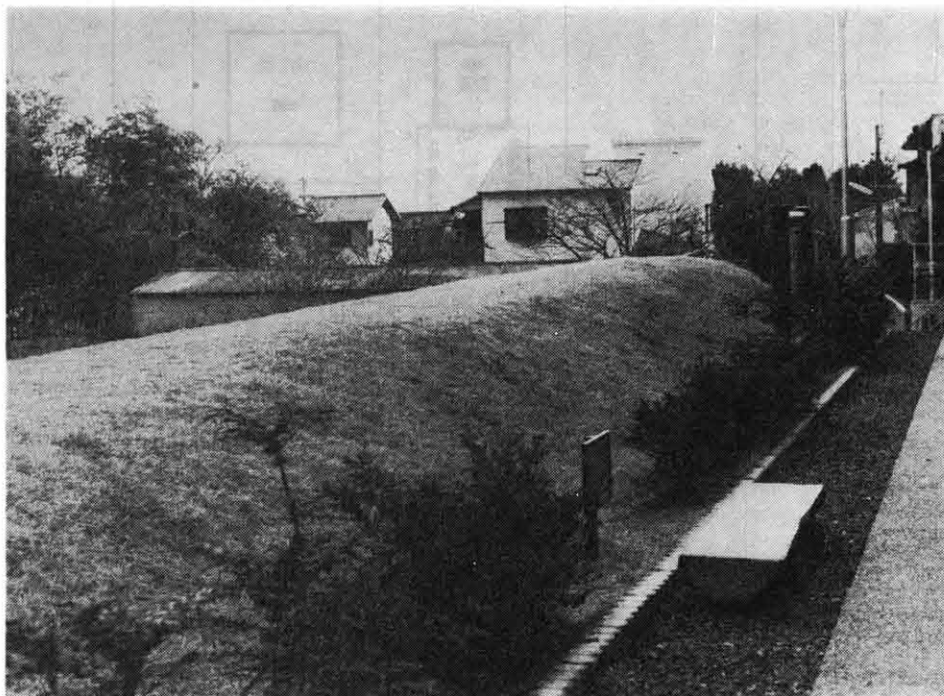
難波宮式軒瓦	22点	(軒丸瓦7点, 軒平瓦15点)	26%
平城宮式軒瓦	32点	(軒丸瓦10点, 軒平瓦22点)	39%
藤原宮式軒瓦	2点	(軒平瓦2点)	2%
長岡宮式軒瓦	24点	(軒丸瓦21点, 軒平瓦3点)	28%
不明	4点		5%

なお、同地は現在、築地跡が整備保存され、見学することができる。(土橋 誠)

〈参考文献〉

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第9集 向日市教育委員会 1983

『新版長岡京発掘』NHKブックス 464 1984



第3図 長岡宮跡築地跡近影

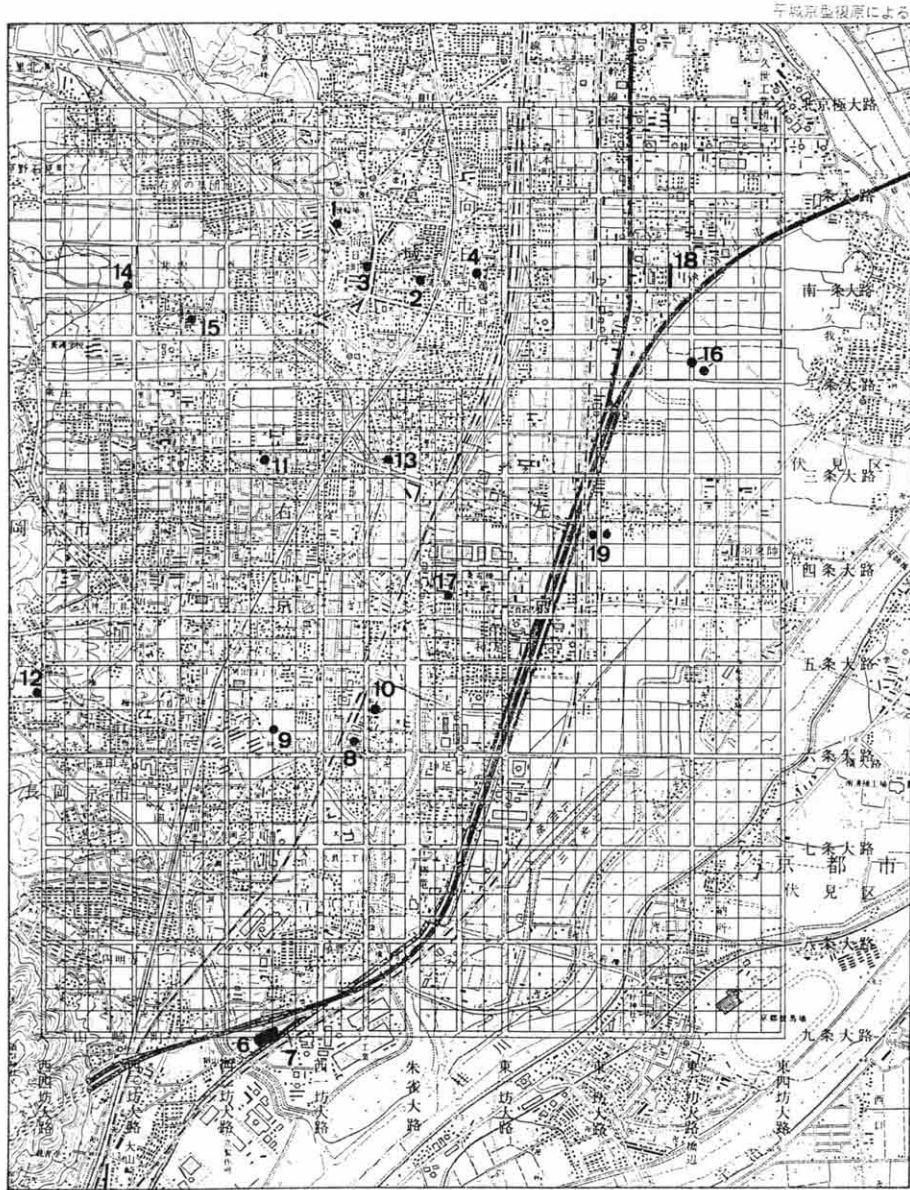
長岡京跡調査だより

11月も過ぎ、日毎寒さが増す中、この乙訓地域では、まだ多くの発掘調査が進められています。この9月から11月の3か月間に行われた発掘調査は、長岡宮跡5件・長岡京跡右京域10件・同左京域4件の計19件あります。なかでも、緑釉陶器の唾壺が出土した長岡宮跡第164次調査、多数の古墳時代の堅穴式住居跡を検出した長岡京跡右京第188次調査、弥生時代や古墳時代の多数の堅穴式住居跡を検出した長岡京跡右京第209次調査等があり、数多くの成果が上がっています。また、発掘調査のほかに立会調査も数多く実施されており、とりわけ向日市教育委員会の行った85-66次立会調査では、SD5202の延長と考えられる溝から、「伊予国」・「讃岐国」・「美作国」・「越前国」等の国名の記された夥しい量の荷札木簡が出土しています。そのほか、中海道遺跡の発掘調査も行われています。

次 数	地区名	調 査 地	調 査 機 関	調 査 期 間
1 宮内第164次	7AN18B	向日市寺戸町西ノ段	(財)京都府埋	60. 9. 4~11. 2
2 宮内第165次	7AN9N-2	向日市鶏冠井町大極殿	向日市教委	9. 9~ 9.21
3 宮内第166次	7AN6G	向日市寺戸町渋川7-13	向日市教委	10.15~11. 1
4 宮内第167次	7AN13F	向日市向日町北山12-1	向日市教委	11.13~12. 2
5 宮内第168次	7AN3C	向日市鶏冠井町御屋敷	向日市教委	11.19~11.20
6 右京第188次	7ANSKT	大山崎町円明寺門田・一丁田	大山崎町教委	3.31~10.20
7 右京第206次	7ANSKT-2	大山崎町円明寺門田	(財)京都府埋	9. 9~ 9.14 11. 8~11.11
8 右京第207次	7ANMK1-2	長岡京市東神足2丁目35	長岡京市教委	9. 3~10.10
9 右京第208次	7ANMSI-6	長岡京市開田4丁目413-1	(財)長岡京市埋	9.10~10. 5
10 右京第209次	7ANMTT-2	長岡京市東神足2丁目1-1	(財)長岡京市埋	9.17~11.26
11 右京第210次	7ANIFD-5	長岡京市野添2丁目134-3	(財)長岡京市埋	10. 7~10.24
12 右京第211次	7ANPSD	長岡京市奥海印寺三反田8-1	(財)長岡京市埋	10. 8~10.15
13 右京第212次	7ANFKR	向日市上植野町吉備寺	向日市教委	10.15~10.18
14 右京第213次	7ANGKT	長岡京市井ノ内頭本3-3	長岡京市教委	11.25~12.24
15 右京第214次	7ANGMT	長岡京市井ノ内南内畑28-30	(財)長岡京市埋	11.26~12. 9
16 左京第133次	7ANWAN	京都市伏見区久我西出町	(財)京都市埋	6.17~10.16
17 左京第138次	7ANLTD	長岡京市馬場井料田	(財)長岡京市埋	9. 9~10.16
18 左京第139次	7ANVKN	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋	10. 1~
19 左京第140次	7ANXWD	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都市埋	11. 1~

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応
(3→4, 4→5の誤りです。)

それでは以下に、9月25日・10月23日・11月27日の長岡京連絡協議会で報告された計19件の発掘調査のうち、主だったものを簡単に紹介します。

宮内第164次 (1)

(財)京都府埋蔵文化調査研究センター

調査地は、現在の京都府向日町競輪場内に位置し、長岡宮跡の西限に近く、向日町丘陵の稜線上に当たる。当初、競輪場造成の際に、かなり削平を受けているものと予想されていたが、長岡京期の掘立柱建物跡2棟のほか、同じく長岡京期の溝・土壇・ピット等を検出し、長岡京期の遺構面が良好に残存していることが判明した。また、出土遺物としては、軒瓦・土師器・須恵器・墨書土器・緑釉唾壺・丸瓦・平瓦等があり、軒瓦は、重圈文・重画文・蓮華文・唐草文等の軒丸・軒平瓦が10数点出土した。墨書土器は、須恵器の杯底部外面に「□人給」と記されているものである。緑釉陶器の唾壺は、土壇から鉄釘とともに出土し、口縁端部を欠くほかは、完存している。

今回の調査で検出した長岡京期の建物跡は、現在までに検出された長岡宮内のものとしては、最も西に位置し、その出土遺物とともに、長岡宮の整備状況を考える上で良好な資料となろう。

宮内第165次 (2)

向日市教育委員会

調査地は、長岡宮朝堂院の北面回廊跡に当たるとともに、古墳周濠を検出した宮内第158次調査地の西接地である。

今回の調査では、朝堂院北面回廊の慶昭門から東へ9間目に当たる根石を3個検出した。この結果、大極殿院の南北長が確定した。また、第158次調査で検出されている古墳周濠の一部も確認することができた。

宮内第166次 (3)

向日市教育委員会

遺構面は、上・下2層あり、上層からは中世の東西溝を6条検出し、下層からは長岡京期の東西溝を検出した。調査地は、長岡宮北辺官衙域に位置し、一条第2小路の延長上にほぼ当たる。

右京第188次 (6)

大山崎町教育委員会

8月までの時点で、中世の掘立柱建物跡1棟・土壇1基・溝数条、平安時代の轍痕、古墳時代後期の堅穴式住居跡3基・合口甕棺墓1基、弥生時代の旧河道や方形周溝墓と思われる溝が検出さ

れてたが、その後の調査でさらに遺構が確認された。その結果、古墳時代の竪穴式住居跡は計17基、弥生時代の方形周溝墓は計6基、存在する。竪穴式住居跡は、いずれも平面形が方形を呈し、竈を持つものも検出された。竈は、北壁ないし北西壁に造られている。時期的には、古墳時代後期のもののほか、布留式の土師器が出土する住居跡もある。

遺物としては、多量の弥生土器・土師器・須恵器のほか、有孔円板・鉄器・土錘・すり石・石皿・縄文土器(縄文時代晩期)等が出土している。

右京第207次 (8)

長岡京市教育委員会

この調査地は、長岡京跡の推定右京六条一坊十二町に当たるとともに、神足遺跡及び勝竜寺城跡にも含まれる。現在は、光輪寺の境内となっている。

この調査では、江戸時代の土葬墓及び火葬墓や、溝・土塚を検出した。この江戸時代の遺構は、都合4期に分かれ、第Ⅱ期の遺構面では座棺の土葬墓が、第Ⅲ期の遺構面では石組みの火葬墓が、それぞれ検出された。最上層の第Ⅳ期の遺構面では、池の一部を検出している。

ただ残念ながら、長岡京跡や神足遺跡、勝竜寺城跡に関係する遺構は検出されなかった。

右京第208次 (9)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、西二坊坊間小路の推定地に当たる。多数の近世の井戸・溝・ピット等とともに、長岡京の西二坊坊間小路西側溝に相当すると思われる南北溝や、長岡京期の掘立柱建物跡・土塚等が検出された。この南北溝は、右京第194次調査で検出されたSD02のほぼ延長上に位置する。掘立柱建物跡は、東西2間の規模である。

右京第209次 (10)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査では、長岡京期の掘立柱建物跡のほか、弥生時代の円形竪穴式住居跡・溝、古墳時代の方形竪穴式住居跡・土塚、江戸時代の掘立柱建物跡・柵列跡・土塚等が多数検出された。また、古墳時代の竪穴式住居跡と方位を同じくする掘立柱建物跡も検出

されている。

古墳時代の竪穴式住居跡には、竈を持つものが見られ、滑石製の紡錘車の出土した住居跡もある。弥生時代の竪穴式住居跡からは、朱塗りの高杯・把手付きの水差し型土器・凹線文を有する台付鉢・石剣の未製品・石斧等が出土している。また、弥生時代の住居跡には、炉跡が3か所と壁溝も3重あるものが検出されている。住居の拡張をしたものであろう。

なお、江戸時代の各種の遺構は、勝竜寺城に関係するものと考えられている。

右京第 210 次 (11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

自然流路を検出した。遺物は、弥生土器、古墳時代の須恵器、長岡京期の須恵器・土師器・墨書人面土器等が出土している。

左京第 133 次 (16)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

この調査地は、長岡京跡の左京二条三坊十五・十六町・同二条四坊三・四町及び東三坊大路・二条第2小路の推定地に当たる。

遺構としては、東三坊大路の東西両側溝のほか、長岡京期の掘立柱建物跡5棟・柵列3条・井戸1基、弥生時代の自然流路・溝状遺構等が検出された。井戸からは、漆器・箸・斎串・墨書土器・軒平瓦等が出土している。そのほか、長岡京期の須恵器・土師器・灰釉陶器等や、弥生時代中期の土器が出土し、縄文時代後期及び晩期の土器片も検出されている。

左京第 138 次 (17)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の溝のほか、長岡京期の溝や柱穴が検出された。

左京第 139 次 (18)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

西羽束師川の河川改修工事に伴う調査で、南一条第2小路の側溝と思われる東西溝と長岡京期の掘立柱建物跡1棟を検出している。

中海道遺跡
8次・9次

向日市教育委員会

8次調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の土器・木製品が出土する幅約4mを測る東西溝等を検出した。9次調査では、弥生時代の竪穴式住居跡を検出した。遺物は、弥生時代中期の土器が出土している。

(山口 博)

センターの動向 (60.9~11)

1. できごと

9. 2 長岡宮跡第164次(向日市)調査開始
~11.2
中国陝西省文物管理委員会范培松氏
当調査研究センターに在籍研修~11.
16
9. 9 長岡京跡右京第206次(乙訓郡大山崎
町)調査開始
9. 20 燈籠寺遺跡(相楽郡木津町)関係者説
明会実施
9. 25 長岡京跡連絡協議会開催
9. 26 和田賀遺跡(福知山市)発掘調査開始
~11.13
10. 1 正垣遺跡(中郡大宮町)発掘調査開始
10. 5 味方遺跡(綾部市)関係者説明会実施
及び発掘調査終了8.5~
10. 7 木津遺跡(相楽郡木津町)発掘調査開
始
10. 8 燈籠寺遺跡(相楽郡木津町)発掘調査
終了7.29~
- 10.15 綾中遺跡(綾部市)発掘調査終了4.17
~
- 10.17~18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
一於京都市一出席(荒木事務局長,白
塚総務課長,安田会計主任,杉原調査
課長補佐,田代調査員)
- 10.18 河守遺跡(加佐郡大江町)関係者説明
会実施及び発掘調査終了5.20~
- 10.19~20 第3回近畿地方埋蔵文化財担当
者研究会一於大阪市一出席(辻本主任

調査員,藤原調査員)

- 10.22~11.2 京都府文化財視察団の一員と
して堤調査課長訪中
- 10.23 長岡京跡連絡協議会開催
- 10.24 長岡宮跡第164次調査(向日市)関係
者説明会実施
- 10.25 綾中遺跡(綾部市)関係者説明会実施
- 10.26 郷土塚4号墳(綴喜郡田辺町一京奈
バイパス関係遺跡)現地説明会実施
- 10.26~27 日本考古学協会大会一於奈良市
一出席(杉原調査課長補佐,松井主任
調査員,小池,荒川各調査員)
- 10.29 全国埋蔵文化財連絡協議会近畿プロ
ック会議一於大阪市一出席(荒木事務
局長,白塚総務課長)
11. 9 隼上り1号墳(宇治市)現地説明会実
施
- 11.26 両丹文化財保護連絡協議会一於綾部
市中央公民館一出席(荒木事務局長,
堤調査課長)
- 11.27 長岡京跡連絡協議会開催
- ### 2. 普及啓発事業
9. 1 第4回「小さな展覧会」終了8.20~
9. 7~10. 6 京都府立山城郷土資料館主
催企画展「発掘調査速報展」に昭和59
年度府下各地遺跡出土の遺物273点を
出品協力
- 9.20~11. 3 福知山市文化資料館主催「大
内城展」に福知山市大内城跡出土遺物
11点を出品協力

- 9.28 京都府立山城郷土資料館主催文化財保護講座で、堤圭三郎調査課長「京都府下における最近の発掘成果」講演
- 9.28～29 第30回研修会開催一於舞鶴西労働セツルメント一(発表者及び題名)荻野繁春「西日本出土の中世遺物について」、中嶋陽太郎「宮津市内の中世土器について」、佐藤晃一「加悦谷地域の中世遺跡について」、三浦到「網野町の中世遺跡について」、吉岡博之「舞鶴市内の中世遺跡について」、中村孝行「綾部市の中世遺跡について」、伊野近富「福知山地方の中世遺跡と遺物」参加者80名
10. 5 福知山市文化資料館で長谷川達主任調査員「大内城跡の調査」講演
- 10.19 (財)大阪府文化財センター主催近畿埋蔵文化財研究会一於大阪市一で、辻本主任調査員「福知山市石本遺跡」報告
- 10.31 全国曹洞宗青年会関西ブロック研修会で長谷川達主任調査員、増田孝彦調査員「京都府の中世墳墓の調査」報告
11. 1～(12. 8) 亀岡市文化資料館開館記念「亀岡の歴史とあゆみ展」に、太田遺跡、篠窯跡群出土遺物134点を出品協力
11. 2 京都府立丹後郷土資料館主催文化財講座で、杉原和雄調査課長補佐「丹後の古墳文化」講演
11. 4 第31回研修会一山の辺の道を訪ねて一開催、「崇神天皇陵古墳」「櫛山古墳」「大神神社」「石上神宮」「天理参考館」等を見学(講師)天理参考館置田雅昭、参加者60名
- 11.22～(12.16) 八幡市教育委員会主催「八幡の古代展」に、狐谷横穴出土遺物を出品協力

府下報告書等刊行状況一覧 (60.1~12)

発掘調査報告書関係

- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』 京都府教育委員会 1985.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会 1985.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』第15冊 同上 1985.3
- 『寂照院総合調査報告書』 同上 1985.3
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985.3
- 『物集女塚塚古墳Ⅱ』(向日市埋蔵文化財調査報告書 第16集) 向日市教育委員会
1985.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第17集 同上 1985.3
- 『平野山瓦窯跡発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1985.3
- 『木寺北遺跡発掘調査概報』(綾部市文化財調査報告 第12集) 綾部市教育委員会
1985.3
- 『高浪古墳発掘調査概報』(京都府野田川町文化財調査報告 第1集) 野田川町教育委員
会 1985.3
- 『宮津城跡第3次発掘調査概要』(宮津市文化財調査報告 第9集) 宮津市教育委員会
1985.3
- 『日置地区第3次発掘調査概要』(宮津市文化財調査報告 第10集) 同上 1985.3
- 『小虫古墳群』(加悦町文化財調査概要3) 加悦町教育委員会 1985.3
- 『蛭子山古墳』(加悦町文化財調査概要4) 同上 1985.3
- 『三宅遺跡第1次発掘調査概要』(京都府網野町文化財調査報告 第3集) 網野町教育委
員会 1985.3
- 『大鳳寺跡第5次発掘調査概報』(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第7集) 宇治市教育
委員会 1985.3
- 『奈良岡遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会 1985.3
- 『平安京左京七条三坊五町』(平安京跡研究調査報告 第15輯) 同上 1985.3
- 『平安京左京八条三坊二町一第2次調査一』(平安京跡研究調査報告 第16輯) 同上
1985.3
- 『本庄町遺跡発掘調査報告書』 同上 1985.3
- 『寺田遺跡発掘調査報告書』 同上 1985.3
- 『ヶ山窯跡発掘調査概要報告』 京都市埋蔵文化財調査センター 1985.6

『京都大学北部構内BJ31区の調査』 京大構内遺跡調査会 1985.8

『下司古墳群』 同志社大学文学部文化学科考古学研究室 1985.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

「長岡京跡左京第118次」(京埋セ現地説明会資料 No.85-01) 1985.1.12

「隼上り遺跡」(同 No.85-02) 1985.1.19

「小金岐1・3・7号墳」(同 No.85-03) 1985.3.2

「郷土塚4号墳」(同 No.85-04) 1985.10.26

「隼上り1号墳・隼上り遺跡」(同 No.85-05) 1985.11.9

中間報告

「土師川改修関係遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.85-01) 1985.3.2

「志高遺跡」(同 No.85-02) 1985.3.13

「波江3・4・5号墳」(同 No.85-03) 1985.3.14

「奥山田池遺跡」(同 No.85-04) 1985.3.18

「木津地区所在遺跡」(同 No.85-05) 1985.3.19

「味方遺跡」(同 No.85-06) 1985.3.22

「綾中遺跡第2次」(同 No.85-07) 1985.5.21

「下畑遺跡」(同 No.85-08) 1985.7.18

「木津川河床遺跡」(同 No.85-09) 1985.7.26

「長岡京跡右京第194次」(同 No.85-10) 1985.7.31

「長岡京跡左京第124次」(同 No.85-11) 1985.8.5

「青野遺跡第9次」(同 No.85-12) 1985.8.6

「長岡京跡右京第193次」(同 No.85-13) 1985.8.12

「仁田城跡」(同 No.85-14) 1985.8.23

「小金岐4号墳」(同 No.85-15) 1985.8.29

「上中遺跡第3次」(同 No.85-16) 1985.8.30

「燈籠寺遺跡第3次」(同 No.85-17) 1985.9.20

「味方遺跡」(同 No.85-18) 1985.10.5

「和田賀遺跡」(同 No.85-19) 1985.11.1

「河守遺跡」(同 No.85-20) 1985.10.18

「長岡宮跡第164次」(同 No.85-21) 1985.10.24

- 「綾中遺跡」(同 No.85-22) 1985.10.25
「山科本願寺」(同 No.85-23) 1985.12.5
「篠・西長尾第2窯跡群1号窯跡」(同 No.85-24) 1985.12.11
「千代川遺跡第10次」(同 No.85-26) 1985.12.20

府下現地説明会資料

- 「昭和59年度恭仁宮跡発掘調査概要」 京都府教育委員会 1985.2.9
「長岡京跡第120次(7ANFZN-2地区)」 向日市教育委員会 1985.2.16
「第7次確認調査(S'SE地区)」 大山崎町教育委員会 1985.2.24
「長岡京跡右京第192次」 大山崎町教育委員会 1985.5.26
「長岡京跡右京第188次(7ANSKT地区)」 大山崎町教育委員会 1985.8.7
「平野山瓦窯跡」 八幡市教育委員会 1985.2.23
「寺界道遺跡のムラ」 宇治市教育委員会 1985.11.9
「天神山古墳群」 園部町教育委員会 1985.3.9
「宮津城跡三ノ丸」 宮津市教育委員会 1985.9.7
「中上司遺跡第2次発掘調査」 加悦町教育委員会 1985.6.2
「京都大学医学部構内の遺跡—AN18区発掘調査—」 京都大学構内遺跡調査会
1985.3.15
「醍醐古墳群」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1985.5.19
「栗栖野瓦窯跡」 京都市埋蔵文化財調査センター 1985.6.9

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985.3
『京都府埋蔵文化財情報』第16号 同上 1985.6
『京都府埋蔵文化財情報』第17号 同上 1985.9
『京都府埋蔵文化財情報』第18号 同上 1985.12
『考古展 第4回小さな展覧会』 同上 1985.8
『京都の文化財』第3集 京都府教育委員会 1985.3
『本能寺古文書目録』 同上 1985.3
『東寺観智院金剛蔵聖教目録』16 同上 1985.3
『東寺観智院金剛蔵聖教目録』17 同上 1985.3
『東寺観智院金剛蔵聖教目録』18 同上 1985.3

- 『東寺観智院金剛蔵聖教目録』19 同上 1985.3
『東寺観智院金剛蔵聖教目録』20 同上 1985.3
『文書解題』 京都府立総合資料館 1985.3
『資料館紀要』第13号 同上 1985.3
『中世の京都』 同上 1985.7
『中世の寺院』 同上 1985.7
『京都府資料目録追録 No.1』 同上 1985.3
『丹後郷土資料館だより』第20号 京都府立丹後郷土資料館 1985.3
『織りと暮らし』 同上 1985.4
『祈りの遺跡—丹後の古代信仰—』 同上 1985
『観音信仰と社寺参詣—丹波・丹後—』 同上 1985
『丹後郷土資料館報』第6号 同上 1985
『酬恩庵の文書から』 京都府立山城郷土資料館 1985.4
『発掘成果速報』 同上 1985.9
『京都府立山城郷土資料館だより』第3号 同上 1985.3
『山城郷土資料館報』第3号 同上 1985.3
『京都市考古資料館年報 昭和58・59年度』 京都市考古資料館 1985.3
『京都市歴史資料館紀要』第2号 京都市歴史資料館 1985.7
『京都市歴史資料館年報』No.3 同上 1985
『京都市文化財だより』第3号 京都市文化観光局文化財保護課 1985.6
『京都の美術工芸』京都市内編上 (財)京都府文化財保護基金 1985
『向日市水道史誌』 向日市 1985.9
『宮津市の指定文化財』 宮津市教育委員会 1985
『波布理曾能』第2号 精華町の歴史を学ぶ会 1985.3
『考古学と移住・移動』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1985.3
『綾部史談』第117号 綾部史談会 1985.2
『史談ふくち山』第394号～第397号 福知山史談会 1985.1～4
『舞鶴市史編さんだより』No.149～No.160 舞鶴市史編さん室 1985.1～12
『土車』第33号～第36号 (財)古代学協会 1985.1～10
『京都考古』第36号～第41号 京都考古刊行会 1985.1～9
『しくてい』第12号・第13号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1985.3～6

受贈図書一覧 (60.9~11)

- (財)北海道埋蔵文化財センター 美沢川流域の遺跡群Ⅶ, 湯の里遺跡群, 礼文島幌泊段丘の遺跡群, 登別市川上B遺跡, 登別市千歳5遺跡, 尻岸内町中浜E遺跡, 今金町美利河遺跡
- (財)福島県文化センター 福島県文化財調査報告書 第144集~第152集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 上並榎南遺跡, 小川城址, 糸井宮前遺跡Ⅰ, 年報-4-
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 年報-5-, 向原・上新田・西浦, ささら(Ⅱ), 愛宕通遺跡, 立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢, 鶴ヶ丘(E区), 大光寺裏, 北塚屋(Ⅱ), 原・丸山, 太田遺跡, 大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原, 三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山
- (財)千葉県文化財センター 千葉県文化財センター年報 No.10, 研究連絡誌 第14号, 千葉東南部ニュータウン16
- (財)東京都埋蔵文化財センター
神奈川県立埋蔵文化財センター 多摩ニュータウン遺跡 No.769, 東京都埋蔵文化財センター年報5
神奈川県立埋蔵文化財センター年報4, 山王山遺跡, 掃源院下やぐら群
- (財)愛知県埋蔵文化財センター
三重県齋宮跡調査事務所 埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ
齋宮跡調査事務所年報 1984
- (財)滋賀県文化財保護協会 は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅺ-1, 同Ⅺ-8, 県営かんがい排水事業関連発掘調査Ⅱ-1, 同Ⅱ-4, 古代の近江, 県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅱ
- 守山市立埋蔵文化財センター 守山市文化財調査報告書 第16冊
- (財)大阪府埋蔵文化財協会 向井池遺跡, 別所遺跡
- (財)大阪府文化財センター 第3回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料, 図書目録追録
- (財)八尾市文化財調査研究会 昭和59年度事業概要報告, 八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度
- (財)枚方市文化財研究調査会 田口, 小倉東遺跡, 枚方の遺跡と文化財
- 奈良国立文化財研究所 平城宮発掘調査報告Ⅹ, 同Ⅺ
- 奈良県立橿原考古学研究所 奈良県文化財調査報告書 第44集, 奈良県遺跡調査概報 1983年度
- (財)元興寺文化財研究所 出土青銅製遺物の実態調査報告書
- 埋蔵文化財天理教調査団 布留遺跡布留地区出土の中世土器
- (財)鳥取県教育文化財団 上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群
- (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 宮前川遺跡
- 福岡市埋蔵文化財センター 福岡市埋蔵文化財センター年報 第4号

胆沢町教育委員会 山形県教育委員会	大清水上遺跡, 塚田遺跡 高阿弥田遺跡調査報告書, 手蔵田遺跡発掘調査報告書, 沢田遺跡発掘調査報告書, 生石2遺跡発掘調査報告書, にひゃく寺遺跡発掘調査報告書, 山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書, 安久津古墳群, 吹浦遺跡第二次緊急発掘調査報告書, お花山古墳群発掘調査報告書, 荒谷原遺跡発掘調査報告書, 分布調査報告書(12)
郡山市教育委員会	郡山東部V, 郡山市文化財研究紀要 第3号, 広網遺跡, 宮田B・良耕地C・D遺跡, 本丸遺跡
芳賀町教育委員会	免の内台遺跡調査概報I
水上町教育委員会	掘り出した水上の昔
市原市教育委員会	上総江子田金環塚古墳発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	日吉・吉住池遺跡発掘調査報告書, 滋賀県中世城郭分布調査3
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書(8)~(10)
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第1集~第3集
米原町教育委員会	筑摩湖岸遺跡・磯湖岸遺跡試掘調査報告書
五個荘町教育委員会	木流遺跡・平阪遺跡発掘調査報告書, 五個荘町埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ
高槻市教育委員会	昭和56・57・58年度 高槻市文化財年報
宝塚市教育委員会	中山荘園古墳
新宮町教育委員会	新宮・宮内遺跡発掘調査報告, 新宮・宮内遺跡範囲確認調査報告, 新宮・宮内遺跡, 吉島古墳
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査報告 第2集
御所市教育委員会	巨勢山境谷10号墳発掘調査報告
御坊市教育委員会	尾ノ崎遺跡
北山村教育委員会	和歌山県北山村下尾井遺跡
玉湯町教育委員会	史跡出雲玉作跡
長船町教育委員会	西谷遺跡
佐賀県教育委員会	肥前国府跡Ⅲ, 金立開拓遺跡, 佐賀県文化財調査報告書 第80集, 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第8集
呼子町教育委員会	辻遺跡
秋田県立博物館	館報 昭和59年度
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第2号
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館年報 第6号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第6集~7集, 歴博 第12号
市立市川考古博物館	下総国分尼寺跡Ⅲ

大田区立郷土博物館	大田の職人
調布市郷土博物館	近藤勇と新選組
出光美術館	出光美術館 館報51
(財)五島美術館	紫式部日記絵巻と王朝の美
富山市考古資料館	富山市考古資料館紀要 第4号, 富山市考古資料館館報 No.12
福井県立博物館	福井県立博物館紀要 第1号, 遺跡は語る
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡発掘調査報告 I
福井県立若狭歴史民俗資料館	いま甦る丸木舟, 鳥浜貝塚
敦賀市立歴史民俗資料館	越前新刀名作展
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No.8
滋賀県立近江風土記の丘資料館	近江出土の中世陶磁
柏原市歴史資料館	柏原の古代寺院址, 柏原市所在遺跡発掘調査概報 1984年度, 玉手山遺跡
(財)辰馬考古資料館	昭和60年度 秋季展
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	日本と韓国の塑像
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀南の遺跡
島根県立八雲立つ風土記の丘資料館	銘文入大刀の世界
岡山県立博物館	筑紫・吉備・大和の遺宝
九州歴史資料館	九州歴史資料館研究論集10, 九州歴史資料館年報 昭和59年度年報 No.4
佐賀県立九州陶磁文化館	字佐宮弥勒寺, 研究紀要 Vol.2, 黄泉の世界展
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	四天王寺, 観心寺要録(二)
大谷女子大学資料館	山陰地域研究 伝統文化 No.1
島根大学附属図書館	九州文化史研究所紀要 第30号
九州大学九州文化史研究施設	
至文堂	日本の美術12 No.235 陶磁
但馬考古学研究会	中ノ郷・深谷古墳群
朝鮮学会	朝鮮学報 第116輯
(財)古代學協會	古代文化 第37卷第9号~第11号
博物館等建設推進九州会議	MUSEUM KYUSHU 第17号
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第2集
京都府教育委員会	教育便覧 1985

向日市教育委員会
長岡京市教育委員会

京都府立総合資料館
京都府立丹後郷土資料館
京都府立山城郷土資料館

同志社大学文学部文化学科考古学研究室

向日市水道部

井上和人・上原真人

井上定清

黒野肇

高井悌三郎

巽淳一郎

中村信幸

中山修一

向日市埋蔵文化財調査報告書 第13集

長岡京市文化財調査報告書 第14冊～第15冊, 寂照院総合調査報告書

京都文化の伝統

観音信仰と社寺参詣—丹波・丹後—

発掘成果速報

下司古墳群, 同志社田辺校地の植生と植物相, 同志社八丁山校地の自然環境調査

向日市水道史誌

研究論集Ⅶ

楠・荒田町遺跡発掘調査報告書, 荘園館・経塚, 地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ, 史跡 五色塚古墳, 神楽遺跡発掘調査報告書, 大坂城跡, 新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要

(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室年報1

播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏

日本の美術12 No.235 陶磁

半田市立博物館研究紀要 第8集

崇道天皇と大安寺

—編集後記—

今年もいよいよおしつまりましたが、情報18号ができましたのでお届けします。

本号は、田辺町郷土塚4号墳と長岡宮跡第164次調査の報告を中心に掲載いたしました。山中章氏の投稿もあって充実した内容になりました。山中氏の報告は、鶏冠井遺跡で出土しました銅鐸の鑄型について書かれており、大変意欲的な労作であります。宜しく御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第18号

昭和60年12月28日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亮

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)